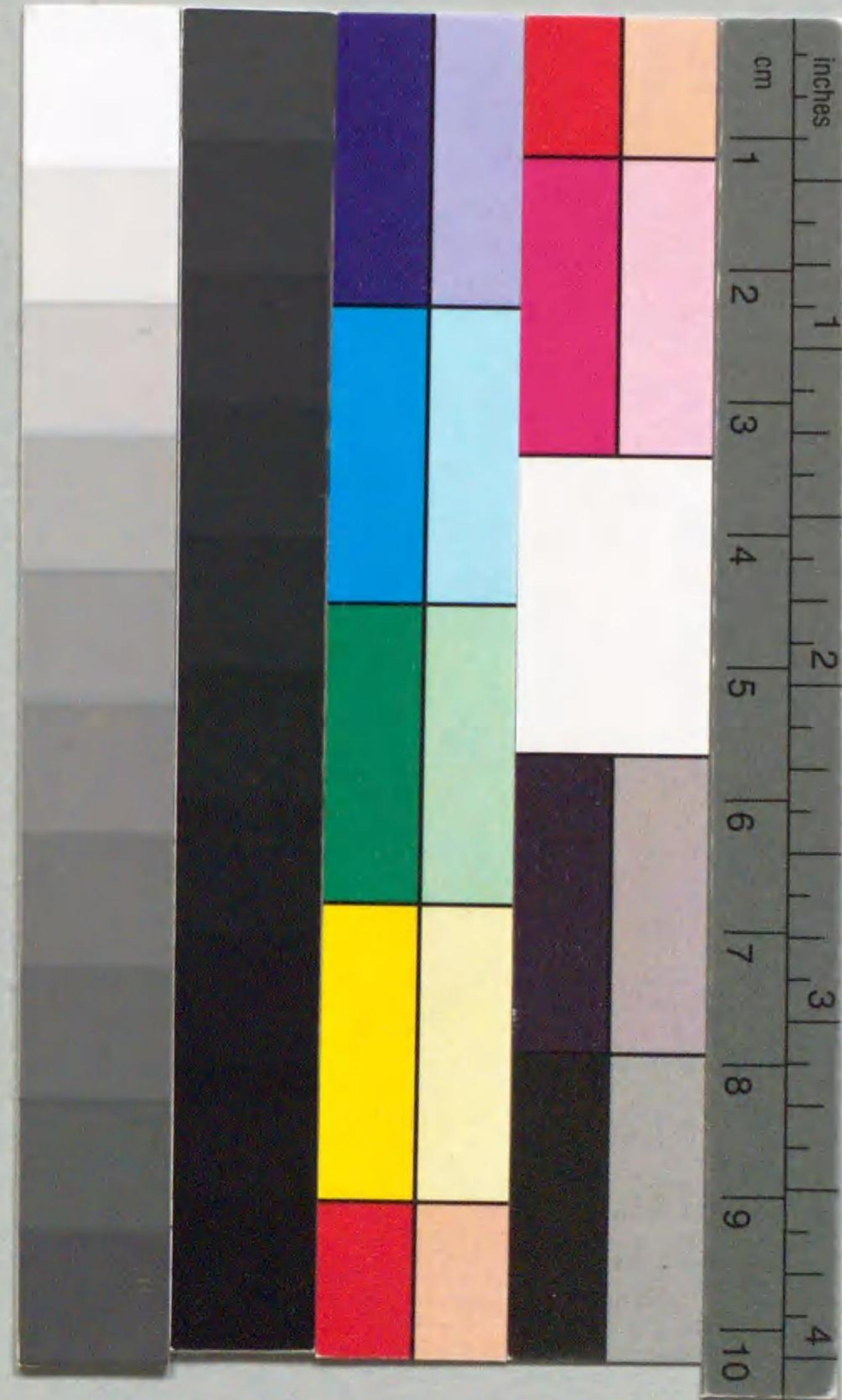


KH261-H20



1200701614238

KH
H20





新女大學

角池寛

モタン日本



KH261-H20

目次



I 種

W



1200701614238

新女大學 目次

教養・趣味・娛樂……………(三)
心のお化粧……………(三)
どれ位の學問が必要か……………(五)
女學校教育の缺陷……………(八)
結婚本位の教養……………(一一)
奥床しい趣味とは……………(一六)
心ぼそい妻……………(一九)
趣味や娛樂は多方面に……………(二三)
必要な性的教養……………(二六)
社交・言葉・態度……………(三〇)

交際上手は良縁の因……………(三〇)
好感を持たせる話し方……………(三一)
新訪問心得……………(三六)
良人に恥をかゝせる妻……………(三九)
相手の氣持を讀め……………(四二)
打てば響く聰明さ……………(四五)
上手な電話のかけ方……………(四八)
美 容・服 装……………(五三)
娘よ、美しくあれ……………(五三)
流石に賢明な婦人……………(五五)
こんな化粧、服装は誘惑され易い……………(五八)
家事・家政……………(六三)
良妻の第一條件……………(六三)

妻の趣味で家庭を飾れ……………(六)

不潔不整頓は不和の因……………(六)

家庭科學の心得……………(七〇)

經濟生活は妻が主となれ……………(七一)

戀愛・結婚・夫婦……………(七五)

戀愛は人生の迷路……………(七五)

生活本位の戀愛……………(七八)

誘惑を防止する唯一の方法……………(八〇)

何故に處女は尊いか……………(八三)

男性から求愛されたら……………(八五)

戀愛 航行術……………(八七)

別れても相手を劬はれ……………(八九)

結婚は樂しき結末ではない……………(九三)

結婚は焦るな、そして焦れ……………(九五)

結婚後最も大切なことは……………(九九)

喧嘩夫婦の妙味……………(一〇三)

良人の愛に甘え過ぎるな……………(一〇四)

良人の心を永久に繋ぐ法……………(一〇七)

母・姑・小姑……………(一一〇)

愛兒を守る重大要點……………(一一〇)

學校に行く子供を持つ母へ……………(一一五)

母は人妻であることを忘れるな……………(一二七)

姑、小姑と圓滿に暮らすには……………(一二九)

劬はり、慰めよ!……………(一三三)

職業婦人の生き方……………(一二七)

職業婦人と結婚……………(一二七)

結婚相手を探すチャンス……………(二九)
 職業婦人と男性の誘惑……………(三一)

現代良人讀本

女性尊重の習慣……………(三九)
 亭主關白と細君女王……………(三九)
 女性尊重は家庭から……………(四三)
 良人の第一條件……………(四九)
 愛情だけでは足りない……………(五一)
 妻を幸福にする道……………(五四)
 良人の第一の覺悟……………(五四)
 妻を捨てるは最悪の良人……………(六〇)
 愛情のバロメーター……………(六三)

愛情には姿態ゼスチュアも大切……………(六五)
 良人の貞操……………(六九)
 収入は妻に……………(六九)
 狙はれた良人の貞操……………(七三)
 妻を異性のすべてと思へ……………(七七)
 家庭は妻の城郭……………(八〇)
 良人の悪徳・悪癖……………(八四)
 家庭の神聖を汚す良人……………(八四)
 妻以外の素人女と關係すること……………(九一)
 女給、藝妓、娼妓などとの遊蕩……………(九三)
 妻に暴力を加へること……………(九五)
 妻を子供扱ひにするな……………(九七)
 家事に干渉する良人……………(一〇〇)

他人の前で妻を叱るな (二〇三)
飲酒癖も悪徳の一つ (二〇四)
賭博、競馬、株に耽る良人 (二〇七)
趣味への耽溺 (二一一)
夫婦一體の心がけ (二二三)
姑と良人 (二二三)
結婚前の妻の過失 (二二八)
妻が不貞を犯した場合 (二三二)
良人教育の必要 (二三四)
貞操 讀本	
貞操と誘惑 (三三一)
休暇中に童貞を失ふ (三三一)

聖者も敗れた肉の誘惑 (二三三)
童貞は砕けやすき珠 (二三六)
戀愛する者の掟 (二三七)
貞操と享樂 (二三九)
カフェーに咲く戀 (二三九)
戀愛に戀する勿れ (二四一)
享樂を奪はれた學生群 (二四三)
まづ戀愛の撰擇力を (二四七)
貞操と賣淫 (二四九)
その後に来るもの (二四九)
鳥潟事件の再検討 (二五一)
蝕まれたる青春 (二五三)
「箱入りの貞操」を排す (二五五)

女子の性慾と男子の性慾……………(二五七)

貞操を失へる良人……………(二六〇)

奪はれた愛情……………(二六〇)

倦怠が不貞を生む……………(二六一)

良人の貞操の生命線……………(二六三)

戀愛は至上ならず……………(二六五)

戀愛結婚者の拂ふ税金……………(二六七)

性的不和の場合……………(二七〇)

舊友が良人の妾に……………(二七〇)

不幸なる例外……………(二七二)

あはれ、空しく咲く花……………(二七四)

貞操と嫉妬……………(二七七)

貞操を疑はれて惱む……………(二七七)

嫉妬は愛情の番犬……………(二七九)

嫉妬を如何に處理するか……………(二八一)

永遠なる良人の苦惱……………(二八三)

夫婦 幸福讀本

夫婦だけの生活……………(二八九)

人妻の敵は何處にゐるか？……………(二八九)

人妻のタイプ……………(二九四)

妻は馬鹿利巧に……………(二九八)

愛情は小出しに……………(三〇一)

良人の愛情……………(三〇三)

夫婦間の不和……………(三〇六)

理想の愛人・理想の良人……………(三〇六)

女の覗かれぬ世界……………(三一)

夫婦喧嘩と女の武器……………(三二)

三角関係と愛情……………(三四)

夫婦和合の道……………(三八)

結婚は生涯に一度たれ……………(三八)

女性よ、賢くあれ……………(三二)

良人の暴力を封じるには……………(三三)

良人の心理を掴め……………(三六)

現代手紙讀本

よき手紙の書き方……………(三一)

心——心づかひが第一……………(三一)

手紙の種類……………(三七)

慶弔の場合……………(三九)

消息文を書くには……………(四二)

字句などの注意……………(四五)

宛名書その他のこと……………(四八)

古今模範手紙とその解釋……………(五三)

ほうせう院 (嫁する女に對する訓戒)……………(五三)

木村重成の妻 (良人への遺書)……………(五五)

頼山陽の母 (子の世話になりたることを謝する禮狀)……………(五六)

九條武子 (年賀狀・病後の身を知らせる文)……………(五九)

下田歌子 (依頼の返事)……………(七〇)

樋口一葉 (誕生日の招待・暴風の見舞ひ)……………(七一)

奥村五百子 (船出する人に)……………(七三)

棚橋絢子 (晝餉に招かれて)……………(七四)

新女大學

長谷川時雨 (髪飾りの依頼文) (三七五)
節婦まさ (遺書) (三七六)
高尾 (某侯への後朝の文) (三七八)
瀬川采女の妻(戦場の良人への文) (三七九)
再婚せる女性からの私信 (三八七)
一少女の身上相談の手紙 (三九一)

教養・趣味・娯樂

心のお化粧

最近、教養といふことが、いろんな方面で、眞面目に考へられるやうになつて來た。これは男女共に、本當の自分に目覺めつゝある現れとして、大變喜ばしいことである。

ところで、『結婚生活は眞の意味で教養の始まりである。』とは、詩聖ゲーテの言葉であるが、これは大體に於て間違つてゐないと思ふ。その意味で、婦人の教養（修養と云つてもよい）は、結婚生活への準備教育だと云つていゝわけである。私はそのつもりで、今日の女性は如何なる教養が

大切であるかといふことを考へて見たいと思ふ。

教養とは、その人が、品性を高めるとか、知識を博めるとか、いづれも個人の問題であるが、婦人にとつては、彼女の全生涯を支配する結婚生活と密接な関係がある。教養のある女と、無い女とでは、結婚生活に、入つてから、雲泥の相違がある。その點で、教養の問題は、男性よりも、女性にとつてより大切なことだとも云へるのである。

ところが、實際はどうかと云ふに、必らずしも、さうだとばかりは云へない。これはある和尚さんの話であるが、ある檀家の父親がやつて来て、

『私の娘は、女學校に行かれぬのでひどく親を怨んで、お父さんは私といふものを勝手に生みながら、少しも教育しようとしなさい。そんなら私にも考へがある。不良少女になつてやるからと喰つてかゝるのです。いつたい、どうしたものでせう。』

と、いかにも心配さうに、云つたといふのである。すると、和尚さんが、

『よいことを教へてあげませう。娘さんにかう云つておやりなさい。お前が云ふ通り私は勝手にお前を生んだのだから、お前に教育させようとさせまいと、それも私の勝手だ。』

と、云つてやつたといふのである。いかにも禪坊主らしい教へ方で、甚だ痛快だが、このやうな不心得な娘が、世の中には、他にも澤山あることと思ふ。

教養とは、女性にとつて、最も優れたお化粧のやうなものである。白粉や口紅の化粧は一夜にしてはげるが、教養といふ化粧は、一生はげない。日と共に、年と共に、いよ／＼匂ひ深く、薫り高くなつてくる。教養とは、また、一生色あせぬ美しい花のやうなものである。

教養は、決して、人の爲めにするものではない。然し、人妻となり、やがて母となる女性にとつて、それがいかに大切であるかといふことは、くはしく述べる迄もない。ハイネといふ詩人は『美人は、景色のよい風景畫のやうなものである。一寸見はよいが、すぐに飽きてしまふ。そこへゆく教養の高い女は、間取りのよい室だ。住めば住むほど、住み心地がよくなる。』
と言つてゐるが、これは至言だと思ふ。

どれ位の學問が必要か

それなら、如何にして教養を高めるかと云ふと、夏目漱石が俳人正岡子規に出した手紙の中で『われ／＼は、常に新しい教養が大切である。それを求めるには、讀書と經驗によるしかない。』

それなのに毎日書いてばかりゐては駄目ではないでせうか。』と云つた意味の言葉がある。これは、一通り學問を済した人の教養論であるが、若い女性にはさし當り學問が、どの程度まで必要かといふ問題になる。そしてこれは、大きな問題だと思ふ。結婚生活をするには、女學校を出てゐなければいけないかどうか、小學校では間に合ふか合はないか、又女學校以上進んで高等の教育を受ける必要があるか何うか、これはいろ／＼考へなければならぬ問題である。

日本でも、最近女子教育が非常に盛んである。女學校を卒業して、少し學才に自信のある女性は、みんな専門學校へ入ることを望んでゐる。然し、結婚といふ立場から考へると、現在の専門教育は、あまり必要でないのではないかと思ふ。先日、ある座談會の席上で、物資統制をやつてゐる商工省の某官吏から、

『いつたい、いまの女子大學は、何處をポイントにして教育してゐるのか？』

といふ質問が出たが、少くとも結婚するための學問としては、かへつて邪魔になつてゐる人が多いやうである。『帯に短し褌に長し』といふ言葉があるが、日本の女子専門學校の教育は、職業婦人の帯となるべく短過ぎ、一家の主婦としての褌となるには、あまりに長過ぎるのだ。その意味で私は、よい結婚をするには、女子の高等教育は必要でないと思つてゐる。女子は、専門教育を受けてしまふと、その性格や趣味が、もう一個の完成したものになつて、後からは、何うにも手の入れやうがなくなつてゐる場合が多い。

結婚する男性は、完成品を自分の妻とするよりも、どちらかと云へば、まだ未完成品を妻として、それを自分の好みに依つて、自分の好きなやうな女性に作り上げてゆく方が、はるかに楽しみではないかと思ふ。どうも、高等教育を受けた女性は、若い男性には餘り歓迎されないやうである。

からなると、大體、女學校教育だけで澤山ではないかと云ふことになる。ところが、現在の女學校教育とは、どんなものか？これがまた、甚だたよりないのだから、心細い限りである。

女學校教育の缺陷

女學校では、地理、歴史、物理、化學、數學、英語といふ風に多くの學科が教へられてゐる。しかし、それが實生活に本當に役立つてゐるかどうか？ 英語をやつてゐるが、女學校の卒業生で、西洋人と簡単な會話が出来る人は、まあ萬人に一人もゐないことは確かである。それどころか、英文のちよつとした廣告文や、商品のレットルなどを讀める人が、幾人あるだらうか？

やつとローマ字が讀めると云つた程度のもが大部分ではないだらうか？

物理をやつてゐても、ラヂオが毀れた時になほせるか、呼鈴の毀れたのを修繕出来るか？ といふことになる、全然だめである。

又女性には、歴史や地理の觀念も非常にのみ込みが悪いらしい。例へば支那事變に就てのニュースを讀む時などでも、支那の地理に關する觀念をちつとも持つてゐない人が多いやうである。だ

から、女性相手に話しても、頓珍漢な返事なので、こちらがウンザリしてしまふ。

數學なども、女學校で教はつた代數や幾何の知識が、實生活にどの程度に役立つてゐるか？

尤も、代數や幾何は、生徒に數理的な教養を與へるために教へてゐるといふのだが、現代の女性に數理的な觀念のないことは、あまりに明瞭なことである。口では二キロとか三キロとか云つても、それが何れ位の距離であるか、少しも知つてゐない。この間も笑つたことだが、私のところに入入りするあるブルジョアの令嬢に、

『横濱と鎌倉とはどつちが遠いか？』

と訊ねて見た。するとその令嬢はしばらく考へてゐたが、どうしても分らなかつた。

『だつて私、いつも自動車で出かけるんですもの。』

と、當然のやうな顔をして濟してゐた。一場の茶吞み話なら、これも愛嬌があつて面白い。然し、これが必要に迫られたときの問題だとすると、これでは甚だ心細い。まつたくゼロである。

さういふ點で、現在の女學校の教育は、實生活には甚だ縁が遠いやうに思ふ。いくら何を教へても、それが實際の役に立たなければ、無意味である。

だから私は、女學校で英讀本を讀ましたり、英文法を覚えさせたりする暇に、日常生活に出て来る英語の單語をはつきり覚えさせる方が、どれ位實生活に役立つか分らないと思ふ。

例へば、プロバガンダとか、イニシアチヴとか、メツセーヂとか、デマゴグとかいふ日常新聞に出て来る政治上の言葉とか、デザート・コースとか、オードヴルとか、ペツパーとか、さういふ料理に出てくる言葉とか、バーゲン・セールとか、プレミアムとか、クローボンとか、チエーン・ストアとか、さういふ商業上の言葉とか、或は新聞、雜誌などに出てくる英語や佛語などの單語を正確に教へる方が、ずつと實際的に役立つと思ふ。銀座などを歩いてるとよく見かけるが、ブロマイドをブロマイド、バナナをパナナ、ビーチ・パラソルをビーチ・パラソルと間違へる程度の、ひどいブロークンな英語の片言を話して得意がつてる女性があるが、あれぐらゐ見つともないことはない。教養の點から云つても、これまたゼロである。

物理や、化學でも同じで、一般的な物理學の初歩を教へるよりも、家庭生活に缺く可からざる物理を、實際について教へた方が、どれ位役立つか知れない。地理、歴史などについても、同じことが云へるやうに思ふ。

とにかく、現在の女學校は、或る意味で花嫁學校である。女學校卒業生の大部分が結婚する以上、女學校教育は花嫁教育であつていゝのである。

それなのに、近來東京などで女學校卒業生を集めて、花嫁學校といふやうなものをやつて居り、世間からも非常に好評を以て迎へられてゐる。とりも直さず、あゝいふことは現在の女學校教育の缺陷を、自ら指摘してゐることだと思ふのである。

とにかく、現在の女學校教育が、ひどく實際生活とかけ離れたものであることだけは、争へない。そこへゆくと、むしろ小學校教育の方が、この頃非常に實生活化されて來たやうである。私の知つてゐる學校で、尋常二年から上の生徒に、『小學校法』と云ふのを教へてゐるが、これなど、なかく實際に即したもので、大いに感心してゐる次第である。

結婚本位の教養

無論、現在の女學校教育が、全然實生活の役に立たないといふのではない。然し、理想を云へば、もつと生活に直面した教育をすべきだといふのである。

『人の食物を嫌ふことあれば、その身必ず瘦す。』とは、昔から云はれてゐる健康上の言葉だが、學問も同じで、あまり實生活とかけ離れたことが多いと、その人の教養が、片輪になつてくる。頭でつかちのやうな人間が出来てくることになる。

例へば、現在女學校の卒業生などに、電報一つ打たしても、爲替一つ組ましても、何だか心細いものを感じはしないか。小爲替をこさへさしても、こちらで取つておかなければいけない受取を、一緒に向ふへ送つてしまふやうなことをやりはしないだらうか。殊に學校に於ける修身は、生活上の道德を教へることが目的であるが、それには先づ、廻りくどい訓話や、寓話などより、生活そのものを、よく生徒に知らさなければいけないと思ふ。

生活即ち人生に就ての、眞實を知ることが一番大切なのに、女學校では、人生に就ての眞實は知らされてゐるだらうか、甚だ疑問である。たゞ人生の美しい點、輝いてゐる面だけを教へて、その裏側の汚れてゐる點、醜い點、嫌惡すべき點を、故意に隠してゐはしないだらうか？ 少く

とも、『臭い物に蓋』式ではないかと思ふ。

實に、人生の美點のみを教へ、かつ説いて、その半面の醜い點、暗い面をひた隠しにする教育ほど、危険なものはない。かういふ教育を受けた女性は、室咲きの花のやうなものである。温室の中にある間はそれでもよいが、結婚生活といふ男女二人の共同生活に入ると、一寸した風波にも歎き悲しみ、すぐに、ヘナクになつてしまふ。こんな教育の仕方ではいけないのである。

いまの女學校では、結婚した後、夫に對して貞淑たれと教へてゐるが、然し、酒飲みの夫に對する心得方、放蕩をする夫に對する心得方、又は夫に他の女性が出來た時の心得方等に就ては、何も教へられてない。又、舅姑にはよく仕へよとは教へても、その實生活に於ける場合の必要な教訓はあまり教へられないやうだ。

夫に對して貞淑たれといふことは、兵士に對して、勇往邁進せよといふだけと同じである。勇往邁進して攻撃の眞の効果を擧げるには、クリークの渡り方や、トーチカの攻撃法や、鐵條網の破壊の仕方、——さういふものを教へておかなければならない。さういふ細かい技巧を心得てゐなければ、近代戰の戰場ではたゞ敵彈に身を曝すことになつてしまふのである。

女性の教養も、それと同じで、近代の複雑した結婚生活では、思はぬところにトーチカも、塹壕も鐵條網も、所々に出来てゐるのである。さういふ新しい困難、新しい障碍に對して、如何にそれを切り抜け、飛び越えるかといふことを、是非とも知つて置かねばならないのである。例へば、トルストイは、

『女性には三つの願望がある。第一は、他人に對して傑出しようとする願望、——しかも極く詰らない事柄、時には悪い事柄によつてさへ、それをしようとする願望である。第二は、有益な、或は善良なことをして褒められたいといふ願望である。第三は、他人から愛せられようとする願望である。ところで、第一は悪いことである。第二はない方がよい。第三はまだしも我慢が出来ることである。然しこれらの一つにも身を任せず、ただ神の教へのみを尊重すること、——これが神聖である。』

と、その日記にしている。また佛教などでも、一切の慾望を絶てば、心の平和が来ると教へてゐるが、なか／＼これ等の訓へを、實生活化するといふことは、困難なことである。

人間生活は、左様に單純なものではない。殊に幾人も人が集つた家庭では、いろいろな性格の持主があり、いろいろな心理の動きがあつて、さうした性格や心理が、いろいろな形で渦を卷いてゐる。そこへ花嫁として飛び込んで行くのには、よほど實生活や人間に對する教養、知識が豊富でなければならぬ。相手の性格を見抜いたり、心の働きを察したりする感覚が發達してゐなければいけないのである。

ところが、前にも述べたやうに、さういふ力を、いまの女學校教育にのみたよることは、甚だ安心出来ないものである。むしろかういふ知識は、女學校で養はれるよりも、女中奉公で養はれたり、シヨップガールや、エレベーターガールや、その他の職業生活に於て養はれてゐることの方が、はるかに多いのではあるまいか。

こゝで、正岡子規に宛てた夏目漱石の手紙を再言するが、『教養とは讀書と實生活からの經驗によつて深められる』ものである。女學校に行けないからとて決して失望することはない。また女學校に行つたからとて、夢々慢心出来るものではない。要は、與へられた實生活に對して、いかに忠實で、聰明に生きぬいてゆくかといふ點である。そしてその力を養ふには、實生活から受ける尊い經驗と、讀書による知識の獲得によることが、一番手短かな方法であらう。その他、講演

を聴くとか、芝居を見るとか、音楽を聴くとか、いろいろある。

奥床しい趣味とは

趣味の方面の修養として、茶の湯、活花、琴、三味線、ピアノなどいふものがある。その中で一番何がよいかといふ詮議より、奥床しいと云はれる趣味とはどんなものか、先づそれを考へて見たいと思ふ。

去年のことであるが或る男達の文士の宴會に、一人のうら若い女流作家が交つてゐた。宴會が済んで男達の餘興が始まり、到頭そのうら若い女流作家の番になつた。すると久米正雄氏が、無理にその女の人を、そのお座敷に出來てゐる高座の方へ連れて行つた。私は、その人は男ばかりの席で、どんな餘興をやるのか、甚だ心細くなつて、氣の毒に思つてゐたが、その人は、始めこそ辭退してゐたが、高座に出てしまふと案外落ちついて、そこにゐた藝者から三味線を借りた。

そして、やゝ含羞みながら、長唄の『綱館』を弾いた。それは本格的な藝で、その撥の音は騒がしい宴席を暫くの間、靜かにした程、牙え返つてゐた。私は、その人にそんな藝があるといふことを知らなかつたので、暫らくは、あつけに取られてゐた程であつた。下町に生れたこの人は、娘時代に長唄の稽古をみつちりとやつてゐたのであるが、おさらひは別として、公衆の面前で、自分の藝を見せたのは、これが初めてであらうと思ふ。恐らく、この人に取つて、かういふ機會は一生に一度ではないかと思ふ。この一生で一度の機會の爲めに、若い時代の何年かを、長唄を稽古したことになるのであつて、それは、甚だ無駄なやうな氣もするが、併し、一度でもかういふ機會があつて、その人の勝れた隠し藝が、人目に觸れたといふことは、その人としては、前の長唄の稽古が生きて來たといふことにもなると思つた。

趣味的教養といふものは、大體、かういふものではないだらうか？ それだから奥床しさといふものがあるのである。『住吉物語』の中に、腹違ひの二人の姉妹を同時に戀ひ慕つて通ひつめた男が、始めは、みめ姿美しい妹に心を惹かれたが、いつの間にか、姉の方が和歌の道にも長け、毎夜の垣根の外に洩れる琴の音の美しさに、その琴の主の姉の方を次第に戀ひ慕つてくると

いふ筋があつたが、これなども、奥床しい趣味が、人を魅きつけたのであらう。
また、ある人妻が長年伴れ添つてゐた良人から離縁を言ひ渡されて、その家を去らうとした時
に、

すれすれの中に花咲く木賊哉

と一句詠んだ。すると良人はこの俳句にひどく感心して、我が妻にもこのやうな優しい心根があつたのかと、離縁を見合せ、その後は圓滿に過したといふ昔語もある。これ亦、奥床しい趣味である。

禪家に、『味噌の味噌くさきは味噌に非ず。』といふ言葉があるが、人間の趣味も同じで、『これが、私の趣味ですわ。』と、いつも鼻先きにぶらさげてゐるやうな趣味は、臭味紛々、實に鼻持ちがならない。

それに反して、發揮する場合は、極めて稀ではあるが、併し一度でもやれば、その人を奥床しく思はせるところに、趣味的教養の値打があるのだと思ふ。

併し、一生に一度か二度しかやる機会のないやうな藝を覚えてゐるよりは、朝に、夕にそれを

發揮し得られるやうな藝事をやつた方が、本當に一生涯役立つのではないかと思ふ。

心ぼそい妻

茶の湯、活花、琴、三味線、ピアノなど、それら女性趣味として結構であるが、その中でも私は、實生活に最も必要な活花などが一番よいと思ふ。三味線、ピアノ、琴なども悪くはないが、それぞれの身分に應すべきもので、花嫁となつたとき、あまり廣くない新家庭に大きなピアノを持ち込んで、いたづらに場所塞ぎになるばかりだし、結婚後、一度も弾いたことのない三味線や琴を、埃に埋めたまゝ床の間に飾つておくことなども、趣味の實生活化といふ點より見れば、あまり感心したものではない。その點で、茶の湯よりは、活花の方がすつとよく、長唄などよりは、フランス人形とか、編物の方がすつと役立つのだと思ふ。

殊に、一番大切なことは、料理だとか、裁縫だとかの、必要な藝である。ところが、この頃の

娘達は、女として最も大切なこの二つを、一番嫌つてゐる傾きがあるのは、まことに痛嘆すべきだと思ふ。

それから、文學の趣味とか、映畫の趣味とか、スポーツの趣味などを、或る程度以上に養つておいた方が、毎日々々の結婚生活を送るにあつて、どれ位役立つか知れない。

野球好きな夫に取つて、早慶戦といふものがどんなものであるかさへ知らず、その勝敗など馬耳東風に聞き流すやうな妻といふのは、かなり心細い妻である。

文學好きな夫にとつて、小説の良し悪しや、小説家の名前をちつとも知らない妻といふのも、これまた心細い限りだ。映畫に於ても同じことが言へる。高級な映畫にちつとも興味がないといふ妻では、映畫ファンである夫をいかに失望させるか知れないのである。

妻は、ある意味で、夫のよき話相手となることが最も大切である。夫が、會社から歸つて夕食の膳に向ふ時に、一日の勞苦を忘れて、妻と世間話をするには、夫の樂しみの一つに違ひないこれだけでも、妻の務めとして十分だと言つて過言でないと思ふ。そんな時に、話題の狭い妻といふものは、夫にとつて、どんなに心細く、不満なものか知れないのである。

野球、拳闘、ラグビー、水泳、そんなものを全然知らない女、小説家の名前を少しも知らない女、歌舞伎俳優や、狂言など、何がなんだか分からないやうな人、かういふ女は、夫の話相手としてはどうか？ 夫が興味を感じる題目について、妻が何んの意見も持たず、少しの理解も有つてゐなかつたとしたら、夫として、どんなに心寂しいだらうか？

かういふいろ／＼な知識は、結婚してから、夫の趣味に應じて、大急ぎで修得することが出来るかも知れないが、矢張り、娘時代にそれを覚えてしまつた方が、覚え易いやうに思ふ。

『趣味などは、結婚後夫の趣味に感じて、夫から教育されるのがよい。』と説く人もある。これは一應道理なことだが、娘時代には趣味の小筐を澤山用意しておいて、結婚後、どんな良人の話にも立派に相手になれるといふことは、これこそ現代的な奥床しさとも云ふべきで、夫にとつて、どんなに有難いか知れないのである。これを妻の側からすれば、夫から愛され、尊敬される糧となるのだと思ふ。

私が、趣味を生活化せよと云ふのも、以上のやうな點を指すのである。

趣味や娯樂は多方面に

娯樂と趣味には、自ら相違はあるが、教養の點から見ると、殆ど同じものと考えてよいと思ふ。

『智恵の小篋』『趣味の小篋』を澤山持つてゐる女性こそ、最も秀れた教養人と云へるのだ。その意味で、『娯樂の小篋』を澤山用意しておくことも、女性としては大切なことである。

由來、日本婦人は、外國人にくらべて、話題が非常に少ない。汽車の中でよく見かけることだが、西洋の老夫婦などは、何か楽しさうにいろ／＼と話してゐるのに、日本の老夫婦になると、お互ひに黙りこくつて並んでゐるだけである。あれはつまり、日本女性の教養が、男子の話相手になる程、進んでゐないからだと思ふ。さういふことは、日本の女性として、恥ではないかと思ふ。

日本婦人が話題が少ないのは、矢張り、趣味や娯樂方面に狭く、その上新聞や雑誌を讀まない爲だらうと思ふ。ところが女學校などでは、新聞を讀むことを禁止しないまでも、獎勵してゐないやうである。本當は、もう少し、若い娘達に新聞に出て来る政治的事件や社會的事件を讀まして、それに對する批判や考へを、涵養さすといふことが行はれてもいゝのではないか。

どうも、これまでの日本婦人は、昔からあまりに家庭に閉ぢ籠つて、見聞を廣めるといふことを怠り過ぎたやうである。たまさかさういふ婦人があると、『はね返り屋だ。』とか『出過ぎた女だ。』とか、あべこべに誹謗さへして來たが、これは婦人の地位を引上げる點で、どんなに邪魔をして來たかわからないと思ふ。

然し、それは世間だけの罪とは云へない。女性自身に、精神的向上の念が乏しいことにも依ると云はねばならぬ。大部分の女性は、女學校を出たら最後、もう本などは一切振向いて見ない。娯樂の點などでも、一歩も進まうとしない。これでは、婦人の思想や感情が、日々に涸渇して行くのは當り前である。學問的でなくてもいゝが、趣味的にも、娯樂的にも斷えず讀書を續けるといふことは、その人の人格を作り上げ、その人の品位を高める上に於て、どんなに役立つか分ら

ないのである。

繰返して云ふが、どんな問題についても、男性とよく話し合へるといふことは、結婚後に、どれ位家庭を明るくし、豊かにするか知れない。ところが、僕などが知つてゐる女性の中でも、男性と對等に話の出来る人といふのは、極く少ないやうである。

と云つたからとて、女性があまりに意見が多過ぎて、男性と議論を戦はずやうになつては困るのである。西洋の諺にも、

『よき話し手になるよりも、よき聞き手になる方がむづかしい。』

といふのががあるが、よき聞き手になる爲めには、やはりあらゆる事物に對する理解と趣味がなければならぬ。然し、政治だとか、經濟だとか、さういふことにまで十分に理解や趣味を有するといふことは、少し無理かも知れないが、女性に相應しい文學とか、美術、音樂、スポーツなどに對して、或る程度の理解を有つてゐたり、裁縫、料理、手藝などに自分の見識や、はつきりした趣味を有つてゐたり、又家庭醫學についても或る程度の心得を持つことは、女性として非常に望ましいことではないだらうか？ それと同時に、トランプとか、ピンポンとか、碁、將棋な

どの家庭娛樂や、テニスとか、水泳とかいふ程度のスポーツは、趣味として、又娛樂として、知つておいた方がわるくはないと思ふ。

藝妓などの中でも、近頃では會話藝者と云ふやうなものが、新橋などで珍重されてゐる。これは藝妓の表藝である三味線、踊などは不得手だが、どんなお客の前に出ても、時事問題でも、趣味方面の話でも、或る程度まで相手になれる藝妓のことで、かういふ藝妓が、如何に珍重されてゐるかといふことは驚くばかりである。

いつか新聞に出た藝妓で、喜春といふ藝妓がゐたが、これは、ジャン・コクトオやシヤリアピシなどから最負になつた女で、この女性は女學校出の會話専門の藝妓である。たゞ、お客の話相手になれるといふだけで、今かなり賣れつ子になつてゐる。昔の老妓などが、たゞ座興の無駄口しかきけないときに、いくらかでも、内容のある話が出来るといふことで、賣出してゐるのであるが、この點から考へても、いまだき男性の座談の相手が出来る女性、一緒になつて面白く話せる女性が、いかに要求され、珍重されてゐるか分ると思ふのである。

必要な性的教養

性的教養といふことも、これ亦、必要なことである。戀愛とか、性慾とか、男女關係に關する大體の知識や、たしなみを少しも知らないと言ふことが、結婚生活に於て、やはり意外な間違ひを起し易い原因になる。良家の奥深く育つて、男女の肉體的關係や性慾について、何も知らない花嫁が、無知なるが爲めに起す間違ひは、案外に多いと思ふ。

さうかと思ふと、自分が處女であるか、ないかさへの區別がつかずに、ひとり惱んでゐるやうな女性のあることは、新聞や婦人雑誌の身の上相談欄で、よく見かけることである。これなどはいかに性的教養がゼロであるかといふ證據で、たゞ撫然たる外はない。

また、男女關係のたしなみなどいふやうなものも、たゞ猥褻とのみ貶すわけにゆかず、性的教養が基礎となつてゐる場合が多いのである。

『浮世艸子』といふのは、江戸時代の黄表紙本だが、その中に、花魁が客に接する禮儀や作法を説いてゐるところがあつたと思ふが、新妻のたしなみとして心得ておくべきことが多いと思ふ。

これは昔の話であるが、佐賀の鍋島藩の先祖で、鍋島直茂といふ人の代に、或る侍が鷹狩のお供をして行つた時、便所を借りたくて、或る百姓家へ入つて入つた。ところがそこには生憎、主人がゐなくて、妻だけであつた。侍はその妻に頼んで便所を借りたのだが、袴を脱いで便所へは入つてゐるところへ、恰度主人が歸つて來た。そして男袴の脱がれてゐるのを見て非常に立腹して、はげしく妻を詰つたことから、一寸した事件になつた。それを鍋島直茂が聞いて、『女一人の家へ行つて、便所を借りるといふことは、甚だ不心得であるし、又、妻が自分一人であるときに、男に便所を貸すといふことは、怪しからぬ。』といふので、二人とも重刑に處したといふ話がある。

かういふ風に、男女間の問題は、いまも昔と變らず、非常にデリケートである。餘程氣をつけないと、自分では邪しくなくつても、他人に疑はれたり、それが爲め思はぬ重大事件を起す場合が決して珍らしくない。

だから、さういふ男女間のたしなみといふやうなものも、やはり男女間の愛情の關係や、性慾とはどういふものであるかといふことを、はつきりと知つてこそ、初めて生れるものではないかと思ふ。

例へば、性慾といふものを、少しも知らない爲めに、重大な過失を犯す女性は、現代にかなり多いやうである。その最もよい例は、ヴェテキントの戯曲『春の目覺め』であらう。

この戯曲に出てくる主人公で、十四五歳になるドイツの娘ヴェンドラは、お母さんに、赤ちやんはどうして生れるのかといふことを訊く。すると母親は、娘の露骨(?)な質問に内心非常に驚きながら、

「結婚しなければならぬよ。愛してね、……忘れちゃ

いけないよ、愛することが出来るやうにね。心のありつたけを捧げて愛さねばならぬのだよ。何んと言つたらいいだらうね。その人を愛さなければならぬのだよ。ヴェンドラ、お前の年頃ぢや、まだ愛することが出来ないがね。もう分つたね。……さあ、わかつたね。……」
から答へてゐる。母親は、なるべく本當のことを知らずまいとして、いかに一生懸命になつて

ゐるか、この會話でよく分るであらう。ところがこの娘は、その後間もなく同年輩の男の友達と乾草を入れてある倉庫の中で遊んでゐる時、よく乾いたその秋草の香りに魅きつけられるやうな衝動から、つひに何氣なしに過ちを犯した爲め、妊娠する。——この娘なども、もつと性慾に關する知識を、はつきり教へられてゐたならば、かういふ過誤を起さないで済んだにちがひない。

とに角、今の學校教育は、なるべく人生の裏道を教へないで、表通りばかりを見せ、表通りばかりの道徳を教へてゐるが、人生の到る處に、横町や露地があつて、その横町や露地では、いろいろ醜いことが行はれてゐる。

さういふ横町や露地へ迷ひ込ませない爲めには、最初からその横町や露地の在り場所を、はつきり教へておくことが必要ではないだらうか? それらのくはしい事に就ては、また何かのついでに、述べて見たいと思ふ。また僕などが説明するより、他により適任者があることと思ふから、ここでは、これだけにしておく。

社交、言葉、態度

交際上手は良縁の因

女性の心が、如何に立派で、性格的に優れてゐるかどうかといふことは、結局、起居動作で外面に現れるものである。日常の起居動作が、その人の心なり、性格なりの現れである。女性の心の優しさ、奥床しさ、淑やかさなどといふものは、すべてその人の動作によつて現れる。この場合動作といふのは、主に對人的動作である。人前に於ける動作である。無論『君子は獨りを慎しむ。』といふ言葉があつて、自分獨りゐる時の動作も氣を附けなければならないことは

勿論であるが、主に對人的動作——即ち、人との應對、社交などに於ける動作で、その人柄が問題になつてくる。だから、女性にとつて、對人的動作こそ一番慎しむべきである。それを詮じつめると、交際上手は良縁の因といふことになる。

それなら、最も奥床しい對人動作とは、いつたいどんなものか？ と訊かれても、それは到底數へ上げられるものでもないし、又、必らず何うすべきであると、定義があるわけのものでもないと思ふ。その人の性格なり、教養なりが、巧まず、氣取らず、傲らず、時に應じて潑刺と、或は度まじやかに、現れてくるものでなくてはならない。

これは故新渡戸稻造博士からお聴きした話だが、博士があるとき、パリのマジエステイック・ホテルに日本のある宮殿下をお訪ね申上げたとき、ロビーでお茶を頂いて雑談してゐると、丁度その前を、いんぎんに會釋しながら通つて行つた紳士があつた。

『殿下、あの人を御承知で御座いますか？』

と博士がお尋ね申上げると、

『知りません。しかし先方では私を知つてる者と見えて、度々顔を見合せますが、その度に丁寧

に挨拶します。本當に溫和しさらな紳士で、イギリスの大學の教授かと思ひます。』
と申されたので、博士が、

『いえ、あの人は有名なヴェネゼロス氏です。』

と申上げるや、殿下も急に御立上りになつて、同氏の後姿をお見送り遊ばした事があつた。このときのヴェネゼロス氏といふのは、有名なギリシヤの革命家であるが、大勢の人に逢はれた殿下にしても、彼を物騒な革命家とは御認めにならぬほど、平素は至極穩かな、禮儀に篤い人であつたと云ふのである。

私はこの話をきいたとき、すぐに、×××のことを思ひ出した。×××は、日本に於けるこれ亦物騒な革命家だつた男だが、感心なことには、我々主義思想の違ふ文士などに逢つたときには、噫にも革命の話などを出さなかつた。しかも禮儀的で、昆虫の話とか、自然科学の話とか、外國の小説の話などを、一種獨特な魅力ある態度で話すのだが、僕は、この二人の對人的動作などは實に洗練された、奥床しさが溢れてゐるのではないかと思ふ。

ところが、世の女性の多くはどうだらうか？ 『われこそは、ブルジョアの令嬢だ。』とか、『わ

れこそは、専門教育を受けたインテリだ。』とか、『われこそは、スター中のスターだ。』とか、『われこそは、同じ女中でも、利口な女中だ。』とか、いろ／＼な姿勢や、動作を以て人と對してゐるものが、いかに多いことであらう。こんな自己陶醉に陥つてゐるやうでは、到底良縁とは遠いものと思はねばならない。

好感をもたせる話方

ところで、社交上、動作と同じやうに大切なのは、言葉である。言葉と云つても、たゞ話しかただけの問題であつてはいけない。言葉をどんなに丁寧、美しい聲で話しても、内容が空疎であれば結局その人の修養の淺薄さ、考へ方の愚しさを現すことになるのである。

だから、人を惹きつけ、人に好感を與へる爲めには、その人の頭がよく、その人の感情が豊富で、氣の働き方が圓滿でなければいけない。それゆゑ、言葉をよくするといふことは、結局前項

で説いたやうに、その教養を豊かにし、趣味を廣くするといふこと、關聯してゐる。然しさういふ根本的な事には前に少し觸れたから、こゝでは主に、人と對談する場合の心得を説いておかうと思ふ。

人と交際するときに、何よりも大切なことは、自然であること、素直であることである。劍道の試合の時に一番大切なことは、『平常心』と云ふことだ。焦つたり、激したり、怒つたり、苛立つたりしてはいけない。常に平常の心、平靜な、落着いた心を保つといふことが大切だと云ふことである。

人と對談する時もそれと同じことだと思ふ。常に氣持を自然に、素直にしてゐることが大切である。そして、自分をよく思はせようとしたり、自分の缺點を隠さうとしたり、相手を負かさうとしたり、相手を恐れ過ぎたり、相手を輕蔑したりすることは、一番禁物である。

常に、自分は自分であるといふ信念を以て、自分の氣持を素直に話さなければならぬ。禪の言葉に、『柳は綠、花は紅。』といふのがあるが、柳は綠にちがひないのだし、花は紅にきまつてゐる。それでよいのだ。それ以外格別の工夫はいらないのである。それを、自分をよく思はせ

ようとしたり、自分の氣持ばかりを傳へようとしたりすると、つい『お喋り』になり、『輕薄』になり、『氣障』に見えてくるのである。自分が知らないことまで、知つたか振りで話したりするから、却つて、ぼろを出すことになるのである。

それから、女性の中には、相當教養があり、學問もありながら、自分のことしか話さない人がある。なる程自分のことは、話手自身にとつては一番重要な問題だらうが、聞き手に取つては、必ずしも重要な問題ではない。

さういふ意味で、自分のことは三分話し、相手のことを七分聽かうとするのが、上手な會話の妙諦であらう。西洋の諺に、

『よき話し手であるよりも、よき聞き手であれ。』——といふのがあるが、人との對談にも、常にその心得が必要であると思ふ。

新訪問心得

人の家庭を訪問する時は、第一番に時間を考へるべきである。といふのは、相手の暇な時を見計ふべきで、夕食前とか、晝食前などには、決して訪問してはならない。ことにそれは、男性よりも女性にとつて、より慎まねばならぬことだと思ふ。だから、電話のある家を訪問する時には、電話であらかじめ都合を訊くのが一番よい。

用談の場合だが、これは、用談をすましたならば、二、三の世間話をした後で、出来るだけ早く辭去した方がよいと思ふ。用談だからと云つて、用談ばかりで歸るのはをかしいと同時に、用談を達しても、牛の涎のやりにだら／＼雑談に時を過しては、

『あの人は、なんの爲めに來たのだらう?』と云ふやうなことになる。

子供のある人を訪問した場合は、話の序に必ず子供のことを訊くべきである。どんな親でも、

子供のことを訊かれると喜ぶものである。その意味で、子供のことを訊くといふことは、相手に對して、一番よい挨拶だといふことになると思ふ。

ところが、此頃の若い娘達が、子供に對して冷淡なのは、不思議なほどである。子供のゐる家を訪ねて、その子供が目と鼻の先きにゐるのに、お愛想一つ云はぬ娘をよく見かける。これでは、その娘がどんなに美しく、そして動作が淑かでも、訪問客としての資格は落第である。

さうかと思ふと、人の子供のことを訊くのをだしにして、自分の子供の自慢を、滔々とやり出す人も珍しくない。川柳に、

満點を云ひたく人の點をき

といふのがあるが、自分の子供が學校でよく出来ることを自慢したいばかりに、人の子供の學校成績などを訊くのはいけないことである。

次に、訪問先きで、お菓子や果物を出された時は、先方の厚意を有難く受けて、一つか二つは食べた方がよい。その方が禮儀にも適ふといふものである。ところが、中にはお菓子や果物を食べないことが、相手を利益するやうにでも考へて、わざと遠慮する人があるが、お客に出した

お菓子などは、その人が食べないからとて、又他に使う場合は極めて少ない。主人側としては、食べてくれた方が、どんなに嬉しいかわからないのだ。それを、喫茶店などでは、驚く程の健啖振りを發揮する娘が、よその家庭に行くと、別人のやうに遠慮してゐるのを見たりすると、かへつて滑稽に見えてくる。

食事の場合も同じだと思ふ。若し訪問先で食事を出されたやうな場合は、快く食べた方がよい。これまた、手をつけないで残した方が、相手の利益になるだらうと云ふやうな残し方はいけないと思ふ。

もつとも、食事なんか出されないやうに、食事時間の三十分位前に、歸るのが一番いゝかも知れない。然し、或る程度懇意な關係であるなら、ある程度の響應に預つた方がお互ひに氣持がいいのであつて、あまり相手の迷惑にならないやうに、あらゆる手数を省かせようと、そのみ氣にかけて、碌々腰も落ちつけぬといふ行動は、却つて、冷めたい感じがしてよくないと思ふ。

だから、人を訪問する場合は、自分と訪問先との關係を、先づはつきり認識しておくことが、一番必要なことである。『自分の訪問が相手に取つて迷惑である。』といふやうな場合は、出來

るだけ簡単に用談を済まして、引き揚ぐべきである。それと反對に、『自分の訪問が、相手を喜ばしてゐる。』と思つたなら、相當の響應も喜んで受け、比較的長座すべきであらう。

然し、この邊の認識は、なか／＼むづかしいところで、多くの場合、なか／＼判定が出來ない。本當は迷惑であるのに、大いに歓迎されてゐるといふやうな感違ひをする人も、世の中にはかなり多いやうだ。又、『相手が暇な人か、多忙な人か?』そこをよく考へて見て、多忙の人の時間は出來るだけ潰さないやうに氣をつけないならならぬ。ところが、世間には、さういふ點に、一向おかまひなしに、自分本位に長談議をするものもかなり多いやうに見受けられる。よく／＼慎しむべきことである。

良人に恥をかゝせる妻

人との交際は、結局心の問題で、たゞ義理だけの交際の場合は、出來るだけ簡単でいゝと思

ふ。心にもなく親しくするといふやうなことは、虚禮である。ことに娘時代には、その爲めに、思はぬ迷惑を蒙る場合が多いのだから、虚禮の交際は、極力避けなければいけないと思ふ。

が、人妻になると、さうはゆかない。むしろ社會人として、義理一遍だけでも、ちやんと果さなければならぬ場合が非常に多い。ことに、同僚や友人の多い男性の妻である場合は、その妻の心掛けの如何が、たゞちに夫の評判にまで響く場合が多いことは、是非心得ておくべきである。私は、よく結婚披露の席上で、新婦に對してさういふ意味の心得を話すことにしてゐる。

近年銀座あたりでは、食べ物屋の店が随分多くなつたが、さういふ店で成功してゐるのは、大抵細君が人づきあひのいゝ場合が多い。細君がお客との應對が巧みで、如才がなく、お客の氣持を惹き付ける店でなければ、仲々繁昌しないやうだ。

サラリーマンの妻は、からした飲食店の細君ほど、夫の勤務に影響はないにしろ、その妻の立廻り如何で、夫の評判をよくしたり、悪くしたりする場合が多いやうである。夫の上役の家へ、臺所口から出入りして御機嫌を取るといふやうなことは、あまりやり過ぎであるかも知れない。また良いときにはよいかも知れぬが、悪くなると、取り返へしのつかぬ羽目に陥るといふ場合も

多いやうである。

然し、細君が、上役や同僚の慶弔にしつかり努めてゐるといふことは、かなり必要なことである。妻が上役の家庭へうまく取り入つて、夫の出世を計つたといふやうなことは、決して獎勵すべきことではないが、然し、非難すべきことでもないと思ふ。そんなに積極的な行動をしなくてもよいが、少くとも妻の行動が夫の評判を悪くしない程度なら、大目に見るべきである。またさういふ交際も、本當の誠意から出た場合は、必らず夫の評判までよくするのではないかと思ふ。ところが、現在の細君の多くは良人の勤先と離れてゐる爲に、さういつた義理ある交際まで、すべて夫まかせにしてゐるものが、非常に多いのである。だから、たまに義理ある場所に出たりすると、へまばかり續出して、かへつて夫に恥をかゝせるといつた人妻の多いことは、まことに痛嘆すべきであると思ふ。

相手の氣持を讀め

言葉は、いかなる場合でも、人の感情を害したり、餘計な告口となつたりして、人を傷けるやうなことがあつてはいけない。西洋の諺に、

『人の悪口を云はぬといふことは、人間の美德の一つである。』

といふのがある。それ位、美德ならざる人間は、大抵の場合、人の噂をしたがるものである。また、人の噂位、面白いものはない。従つて、つい人の悪口を云ふ危険が誰にも多いのであるが、人の悪口を云ふことは、そのたびに、自分の人格を傷けてゐることになるのであると知るべきである。例へば、Aといふ人に向つて、Cの悪口を盛んに云つてゐると、Aは喜んで聞いてゐるものの、心の裡では、

『自分にCの悪口をこんなに話す人間だから、Cに會つたら、又自分の悪口を云ふのではない

か?』と疑はれるやうな場合だつて、想像してよいのである。

それから、他人のことを話す場合は、常にある程度の敬意を失はないやうにした方がよいと思ふ。例へば、僕の所などへ来て、久米正雄氏の話をする時に『久米が——』『久米が——』といふやうに呼び捨てにして話す人がゐるが、さういふ人は久米氏の所へ行けば、若しくは、誰か、さうした人の所へ行けば、『菊池が——』『菊池が——』といふやうに、僕のことを呼び捨てにする人なのである。さういふ人は、面と向つてゐる人には敬語を遣ひ、敬稱を用ひるが、陰ではすぐ呼び捨てにする人間である。これでは、筐に指した鮭を、あとからく落してゆく熊の愚かさ

に等しいではないか。人は、その人の前で言へないやうな言葉は、陰でも云はぬがよいのである。又、相手が話せないやうなことを、例へば、英語を知らない人の前で、自分だけ知つてゐるからと云つて、勝手に話すやうなことは、非常識の譏りをまぬかれないであらう。

だから、常に相手の感情を尊重するといふことを一番に考へなければいけないと思ふ。相手が晩婚を氣にしてゐる人の場合には、結婚難の話などはしてならない。相手が、髪の毛の少ないのを氣

にしてゐる場合には、髪かみの少ない人ひとの話はなしをしてはならない。相手あいてが色いろの黒くろいのを氣きにしてゐる場合に、相手あいてが背せの低いことことを氣きにしてゐる場合に、色いろの黒くろいことや、背せの低いことことや、器量きりょうの悪いことことの話はなしをしてはいけない。又、相手あいてが自分じぶんよりずつと貧しい場合に、自分じぶんが着物きものを買かつたことや、指環ゆびわを買かつたことなどを話はなしてはならない。相手あいてが小さい家うちにゐる時に、自分じぶんの家うちの廣ひろいことや、普請ふしんのことなどを話はなしてはならない。

要するに、相手あいてが少しも興味きょうみのない話題わだいに、相手あいてを引入れてはならないと云ふことにもなる。とにかく會話かいわに於ては、相手あいての感情かんじを尊重そんじやうし、相手あいての感情かんじを傷きずけないで、むしろ助たすけはるといふことが、一番大切ばんたいせつなことである。それが相手あいてに對する本當ほんたうの誠意せいいといふものである。人と交際かうさいするといふことは、お互たがひに人生じんせいの不幸ふかうを慰なぐさめ合あひ、勵はげまし合あひ、喜よろこび合あふ爲ためであるから、常つねに人ひとを喜よろこばし、人ひとを慰なぐさめるといふやうな話はなしをした方がよい。さういふ氣持きもちから話はなしをすれば、決して空々しいお世辭せじや、空々しい愛嬌あいけうなどは出て來なくなるのではないかと思ふ。たゞ、お世辭せじと云つても、自分じぶんが心こころの中で悪いと思つてゐることなどを、反對はんたいに褒ほめたりすることは、無論むろんいけないことであるが、自分じぶんが心こころの中でよいと思つてゐる以上いじやうそれに倍ばいにし、三倍さんばい

にして話はなしすことは、決して悪いことではない。文章ぶんしやうなどでもさうだが、心こころの表現へうげんといふものは、いくらか誇張こたぎした位くらいで、恰度ちやど相手あいてに本當ほんたうなことを通つうじさせるものである。

前まへにも云つたことだが、殊ことに女同士おんなどうしでは、相手あいての夫おとこや、相手あいての子供こどものことは、出來るだけ尊重そんじやうし、話題わだいの材料ざいりやうにし、そして出來るだけ褒ほめ合あつた方がよい。さういふ會話かいわは、生活せいかつを明るくし、生活せいかつに就つての元氣げんきをつけ合あふことになるからである。それを、お互たがひに、自分じぶんの子供こどもや夫おとこのことことを話はなしたがつたのでは、表面へうめんはどんな會話かいわをしてゐても、結局けつぎは感情かんじの縫ぬれ合あひであり、自慢じまんの競争きやうそうになり、永ながく話はなせば話はなすほど、お互たがひの氣持きもちを索然さくぜんとするだけだと思ふのである。

打てば響く聰明さ

『打てば響く。』といふ言葉ことばが、昔むかしからあるが、社交しゃうかうに於おいても、對話たいわにあつても、打てば響くといふ聰明そうちめいさと、機敏きびんさとが必要ひつようだと思ふ。

その意味で、あまり恥しがるといふことはいけない。女性があまり恥しがるといふことは、男性との交際などには却つてそれが嬌羞のやうに見え、一種の媚にさへ見えることがある。従つてあんまり羞しがるとは、一種の性的魅力となつて、男性との交際などは、間違ひの因になることがある。

然し、美しい可憐な花も羞らふ娘に譬へられてゐるやうに、女性が羞かしのいふことは、一つの美しい點で、そこに女性としての特有な魅力があるのであるが、問題は、極端に恥かしのことはいけないといふのである。

遠慮なども、それと同じで、遠慮のないことは、人間を何んとなく下品に見せるが、併し極端な遠慮は、かへつて相手の感情を害するものである。いくらすゝめられても、座蒲團を敷かない人、いくらすゝめられても、お茶を飲まない人、いくらすゝめられても、御飯を食べない人などは、却つて相手に迷惑をかけることになる。例へば、一緒に圓タクなどに乗る時に、あんまり遠慮し合つて、席を譲つたり、譲られたりしてゐることは、交通の妨害にもなり、自動車事故の原因にもなる場合だつてあり得るのである。『三度諫めてきかれぬ時は、白木の三方に九寸五分。』と

いふやうな、至極物騒な歌があるが、遠慮は二度までが程よく、三度目には受けた方が聰明だと思ふ。

又、女性は、とかく人前なんかに出ると、態度が煮え切らないで、返事を躊躇したりするが、人前で變な思ひ入れをしたり、もぢくしたりすることはいけないことだ。矢張り、虔しやかな態度で、自分の思ふことをはつきり云つた方がいゝのである。太鼓は、音を聽かんが爲めに打つものである。いくら打つても、音の出ない太鼓ほど、じれつたいものはないではないか！

だから、人と應對する場合には、自分を率直に出さうといふことが、一番大切なことである。自分をよく思はれようとか、偉いと思はれようとか、美しく思はれようとか、上品に思はれようとかすることが、一番いけないのだと思ふ。反對に、自分をありのままに思はれようとか、上品に思はれようとか、却つて落着きを與へ、品を與へ、慎ましさを與へるものだと思ふ。だが、いかに天真爛漫がよいと云つてもあけすけにやれといふことではない。露悪的になれといふのでもない。かうなる、一部の人は、自分を率直に出した爲めに、相手に輕蔑されはしまいかといふ不安が湧いてくると思ふ。これは、その人の平素の修養が不足してゐるからで、その場になつて、何うなるもの

ではない。だからこそ、不斷の修養が大切になつてくるのである。不斷修養しておけば、そんな心配など無用なことになつてくる。

女性が氣障に見えたり、生意氣に見えたり、浮ツ調子に見えたりするのは、人前へ出たときに自分を自分以上に見せようとするところから起る喜劇である。不斷自分が磨き、自分の知識を豊富にし、教養を高めておけば、人前に出た時に、そんな俄造りの態度や言葉遣ひをする必要がなくなつて、自然のまゝに、度しやかに行動することが出来るやうになるのだと思ふ。

上手な電話のかけ方

いまの時代では、電話のかけ方は、かなり大切なものである。會社や銀行などの電話係は、かなり重要な役で、電話係の良否は、その會社の評判にさへ關係すると云はれてゐる。

電話で、一番心得ておくべきは、電話をかけてよこす相手が、不明だといふ點である。どんな

偉い人がかけてゐるか分らない。その家の主人公の上役がかけてゐるのかも分らない。又、どんな悪い男がかけてゐるかも分らないのである。強請の暴力團がかけてゐる場合もあるし、詐欺師や、泥棒や、不良青年からかけて來ないとも限らない。

だから、電話の應對は少しの油斷があつてもいけないのである。さういふ意味では、一應は誰からかゝつて來ても、丁寧な言葉を遣ふことが必要である。それも、なるべく事務的に、明瞭な言葉で、丁寧に應對することが必要である。相手の素性が分つたらば、それからその相手に應じて言葉遣ひを變へてもいいから、先づ最初、相手を確かめるまでは、公式的な、丁寧な言葉を遣つた方が、間違ひないと思ふ。

そして、相手から『モシ〜』と云はれたなら、すぐこちらから『こちらは、渡邊でございます。』といふ風に、自分の名前を云ふのが、一番簡單で、便利だと思ふ。この場合、番號を云ひ合ふのは、意味がない。

こちらから、かけるときも同じで、『モシ〜、あなたは渡邊さんですか?』と云ふやうに訊いた方がいゝのであつて、先づ番號を、『モシ〜、あなたは芝の千七百三十一番ですか?』と訊

いてから、『はい、左様でございます。』と云ふのを待つて、『それでは、渡邊さんですか？』といふ風に訊くのは、二重の手段で甚だ感心出来ないやり方である。

電話は、なるべく、簡潔な言葉で、明瞭に用事だけを話した方がいゝのである。然し電話のうまい、下手は、結局練習の問題であつて、どんなに學問があつても、利口でも、電話だけは慣れないと駄目である。だから、平生の練習が大事になつてくる。

電話が自分の家にある人は、自然電話の練習が出来ることが、ない人は、何かの機會を作つて、電話をかける練習をした方がよい。これは、なか／＼大切なことだと思ふ。女學校などでも、生徒に電話での應對などを練習させた方がいゝのではないか。嫁入先きに電話があつて、すぐに電話をかけさせられたが、不馴の爲め、間違つていふやうなことは、誠に氣の毒なことである。おまけに間違ひでも起して、『あの嫁は、電話一つ満足にかけられない。』といふやうな非難を浴びせられて、第一印象を悪くするのは損なことである。

僕なども、時事新報記者時代、不馴の爲めに辛い経験があるが、どうも電話は不馴であると、聞き違ひやすい。そのため、いろ／＼面倒な間違ひを起すことだつてあるから、ひとり花嫁ばかり

りとは云はぬ、會社やデパートに勤めたり、女中奉公に出かける者まで、前以てその練習をしておくことは、どんなに便宜だか知れないと思ふ。

美容、服装

娘よ、美しくあれ

私の家に、よく遊びにくる娘さんで、女學校を出ると、急に化粧や服装に氣をつけて、美しく飾るやうになつた人がある。いつか私が、『ばかにめかすやうになつたね。』と、云ふと、その娘は少し顔を赤くしながら、『だつて、お父さんが、やかましく仰有るんですもの。』と應へた。その言葉の中には、年頃の娘をもつた父親の心遣ひがあつて、思はず僕は、『あなたはよいお父さんを持つて幸福ですよ。』と、朗らかな氣持で云つたことである。

僕は、文學者だから、年頃の女性が化粧することや、服装を飾ることには、少しも異議を唱へたくない。むしろ、年若き娘よ、美しき上にも、さらに美しくあれと云ひたいと思ふ。僕自身はいたつて、なりふりには人一倍無頓着な方だが、然し、着飾つた婦人に接すると、その服装の中にその人の個性が出てゐるかどうか、着物の柄が、色彩なり、羽織との調和なりに、その人獨特の趣味が出てゐるかどうか？ といふことに注意を向けることにしてゐる。そして、美容や、服装のいろ／＼な點が何から何まで、その人の趣味や人品にびつたりと調和してゐる婦人であると、『あ、この人は、きつと聰明な人にちがひない。』と、心から、尊敬を拂ふ氣持ちになるのである。然し、さういふ婦人に逢ふことは、この世で、紫の薔薇の花を探し當てるより、一層むづかしいやうである。これには幾分かの誇張はあるが、少くとも、服装や化粧が、その人の趣味とびつたり合つてゐるといふやうな婦人は、數へる程しかないと思ふ。

それは、なぜかといふと、自分といふものを、ほんたうに知つてゐないためだと思ふ。何ういふ色が、柄が、持物が、自分によく似合ふかといふことを考へないで、ただ徒らに、そのときの流行を追ふからである。寶塚の少女歌劇の生徒達が、オリブの袴を裾短くはくからと云つて、

誰も彼もそれを真似たからとて似合ふものではない。デパートで、繪羽織を賣出したからとてそれを着てよく似合ふといふ女は、寧ろ少ないと思ふ。美容でも同じで、パーマネットが流行してゐるからとて、小麦色の白粉が流行してゐるからと云つて、誰にも彼にも似合ふわけではない。イソップ物語の中に、孔雀の羽をつけた鳥の話があつたが、この鳥のやうな女性が、いかに街頭に、溢れてゐるか知れないのである。

外國の映畫女優の眞似をして、眉をわざと細く描いたり、蜥蜴色のどぎつい口紅を塗つたり、踊り子のやうな柄の洋服を着て、銀座などを歩いてゐる令嬢が澤山あるが、あれなども、一つの街頭風景と見れば面白いが、結婚準備時代の美容や服装といふ點から見ると、甚だ感心出來ない。少くとも己れを知り聰明である女性ならば、決して、あんな服装はしないと云ふ。

だから僕は、婦人の美容や服装については、何がよいとか、何がいけないとか、それを詮議立てするよりは、自分によく似合ふもの、自分の趣味とぴつたりするものを選ぶことが、第一の要諦だと思ふのである。然し、自己を知り、何が自己にぴつたり合ふかを選ぶことは、これまた平素の教養なり、心掛けなりによるもので、一朝一夕に出來るわけのものではない。だから、デパ

ートに出かけて、『わたしに、どれが似合ふかしら？』などと、永い間立往生してしまふことになるのである。

流石に賢明な婦人

縹緞に自信のある人は厭である。同時に美容や、服装に自信と自惚れの多い女性も厭である。ところで、私が、數多く逢つた女性の中で、『流石は賢明な方だ。』と感心したのは、九條武子夫人であつた。あの美しい顔で、あのすらりと均齊の取れた體で、洋服を餘り用ゐたことがなかつたやうである。日本の婦人には、どうも洋服がほんとに似合ふ人は少ない。洋服を着た爲めに、その人の個性や、本來の美しさを壊してゐる女性が非常に多いやうに見受けられる。九條武子夫人は、流石に教養の高い、聰明な婦人だつただけに、その邊のところをよく承知してゐられて、洋服を着られなかつたのだと思ふ。少くとも女史の如きは、己れをよく知

つてゐた方だつたと思ふ。

洋服姿も、今日の時勢で、一概に悪いものではないと思ふが、用ゐるなら、自分自身の姿、容髪等をよく／＼観てからにして貰ひたいといふのである。

美容や服装に就て、私の注文はこの位にして、氏も、素性もない一女中が、身だしなみがよかつた爲めに、大文豪の夫人となつたといふ例をあげて置かう。それは、有名な頼山陽の夫人であつた。

日本外史を著して有名な頼山陽は、初め醫師江馬春齡の娘を貰はうとしたが、當時赤貧洗ふが如き山陽は、一も二もなく斷られてしまつた。そこで、京都の雨宮某の娘に目をつけて、友人の小石元瑞を介して申込むと先方でも快く承諾した。そしてある一日、小石の家で見合ひするこゝになつた。

山陽も、このときは、非常に嬉しかつたと見え、定刻より早く元瑞宅に出かけて、娘の來るのを待つてゐた。が、いくら待つてゐても、やつて來ない。待ち切れなくなつた山陽は、どうしたのかと先方へ問合せもらふと、『いま、お化粧のさい中です。』といふのであつた。

いたつて、身邊を氣にしない山陽は、この返事にいさゝか失望しながら、さつきから氣がついたのは同家の女中でりえといふ十八の娘、美貌といふ程ではないが、髪のかたち、木綿地ながら、きりりとよく身仕度されてゐるその服装、そして、まめ／＼しく立働いてゐる動作が甚だよい。室の掃除や飾りつけをするのを見ても、實に氣がきいてゐる。さう思つてくると、りえの容子がなんとも云へぬほど、優しく淑やかに見えてくる。

そこは、山陽先生であつた。主人の小石にりえの性質や平素の行ひを訊いて見ると、一點非の打ち處がない。いよく心が惹かれた。『生涯の大事を定める約束を違へるやうな娘御は、當方から御免を蒙る。』即座に、雨宮の方は斷つてしまつて、『その代り、お宅のりえ女は、至極優しい才女と思はれるから、りえ女を貰ひ受けたい。』と持ち出した。これには小石も、りえ女も、あまりに唐突なので驚いたが、山陽の方は、いよく眞剣であつた。

りえ女は、山陽に嫁してから、夫について漢學と詩を學び、梨影女史となつて賢夫人の名を博したが、實は、かうしたことから山陽に見込まれて、夫人となつた人である。

こんな化粧、服装は誘惑され易い

トルストイの『男と女』といふ論文の中に、次ぎのやうな、興味ある一章がある。

『大なる、不幸の源泉である情慾を、わたし達は、抑へようとか、低めようとかするどころか、却つて、あらゆる方法を盡して、燃え立たせようとしてゐる。そして後になつて、苦しがつてこぼすのである。』

ことに愚かなのは、女性で、彼女達は、装ひをこらしては、われと我身に情慾を燃してゐる。他人を着飾らせながらでさへ、彼女は想像によつて情慾の中に生きてゐるのである。この爲めにこそ服装は、女に對してしかく威力があるのである。』

トルストイは、元來女性に對しては、苛酷過ぎるといふ非難がある。この一文なども、少し女性性をいぢめ過ぎる嫌ひはある。然し、この中に含まれてゐる眞實は、嚴密に云ふと否定出来ない

のではないかと思ふ。

日本にも、昔から、『誰に見せうとてべにかねつけよ。』といふ言葉があるが、ある意味で、女性の化粧や服装は、男性を對象として、ほどこされるものではないだらうか？ それだとすると、美容や、服装の如何によつて、男性に對して、高尚なる心呼び起させもすれば、劣情を唆るものともなるのである。

これは、少し古い話だが、芥川龍之介のところへよく來た新聞記者で、女を誘惑するのに、驚くほど自信の強い男がゐた。『僕は、日比谷公園の入口に立つてゐて、若い女が來るのを見てゐると、この女は必らず誘惑出来るか、誘惑しても無駄かといふことが、ピンと直感出來ます。そして、いままでこの直感に誤つたことがありません。』と、豪語してゐた。『どうして、そんなことが分るのか？』と訊いたところが、『ちやんと、顔に書いてあります。さういふ女は、自分の顔に白粉で、どうか私を誘惑して下さいと書いてあります。それから、女の服装を見ても、すぐ分ります。』と、云つてゐた。

あまりに、くだらぬ話なので、それ以上くはしい説明も訊かなかつたが、いまにして思ふと、

この新聞記者の炯眼は恐るべきであつたと思ふ。

三田村鳶魚氏の本を見ると、江戸時代には、赤い腰巻を用ひるのは遊女に限られてゐたといふが、女性の美容や、服装の中には、娼婦的なものと、さうでないものがあると思ふ。いつかの新聞に、ある良家の令嬢が、帝國ホテルの裏の薄くらがりを歩いてゐると、一外人に「街の女」と間違へられて誘惑され、一枚の紙幣を握らせられてからその令嬢は、始めて自分が娼婦と見られたことを知つて、憤然引き返して来たといふ記事があつたが、もしもこのとき、外人が紙幣を出さなかつたら、その令嬢はどうしたであつたらうか？ 自分を娼婦と見られなかつたといふだけのことで、むぎく外人の弄び物になつたのではなからうか？ 慄然としてくるのである。それなら、どういふ種類の化粧が、どういふ傾向の服装が、男性から誘惑され易いかといふ具體的な問題は、決して一概には云へないと思ふ。矢張り、その人の教養なり、個性が自然と化粧や服装に現れてくるのであるから、常に、聰明に、理智的にと修養することが一番大切な心得である。

いたづらに、流行のみを追つたり、他人の美しさを模倣したりして、その人の身につかない化

粧や服装に憂身をやつす女性は、何處かしら、ものさもしく見えるものである。個性のない、意志の薄弱な女である。何かしらを、自分の持つてゐるものだけでは満足出来ずに、求めあぐねてゐる女である。前の新聞記者の云ふ『必ず誘惑出来る』といった女は、恐らくかういふ人を指したのではないかと思ふのである。

うは、ただ見よいペラ／＼したものを、それも控へ目に着てゐるのなら、どこか好意も持つてゐるが、これ見よがしに飾りたて、街頭を闊歩してゐるのは、ウンザリさせられる。悪い意味での『呼べば、靡かん風情』とは、かういふ種類の女性ではないかと思ふ。『人間は、餘計なもので身を飾り立てゝゐるほど、滑稽に見えるものだ。』——これは、カーライルの言葉だが、安物や、まやかし物で、身邊を飾り立てゝゐる女性などは、決して愉快なものではない。

家事、家政

良妻の第一條件

人妻が、料理が上手か下手かといふことは、家庭生活に於て、最も大切なことである。その意味で、女學校の科目中、一番必要なのは、割烹だと云つてよいと思ふ。英語や數學は、家庭生活に役立たない。代數や幾何の初歩を心得てゐたところで、それを實用化する場合は、一生に一度あるか無いかであらう。それに比べると、割烹の知識は、新婚生活第一日から、役に立ち、新婚生活の第一日に於ける味噌汁の味が、將來の家庭生活を支配すると云つても、決して

て過言ではない。

尤も、新婚當時は、良人も、味噌汁が少しぐらゐまづけても、氣にしないし、御飯が固過ぎても軟か過ぎて、たいしたことでないかも知れない。しかし、新婚當時の華かな、楽しい夢がだんだん魅力を失つて來る時分になると、味噌汁の味のまづさが、良人に沁々と感じられてくるのである。

料理の巧みな妻は、良人にとつて、一生の得である。尤も、料理といつても、格別に珍らしい料理とか、高價なものを使つての料理の仕方とか、そんなことを知つてゐたところが、それを實行出来る程の金のある場合以外は、何の役にも立たない。だから、たゞ惣菜料理の上手、下手、毎日の獻立に氣が利くかどうか？ 床しい心遣ひが見えるかどうか？ といふ點が、大切なのである。

どうせ、百圓前後の生活では、食ひ物の種類も、たいがい決つてゐる。然し、決つてゐるからと云つて、『今日もコロツケ、明日もコロツケ』といふ歌のやうだと、家庭生活がいかに味のな

いものとなつてくる。それは妻の心の働きのないことを如實に示してゐることで、良人にとつて

これほど不愉快なことはない。つましい生活での料理であるから、どうも單調になつてくるであらうが、その料理の味付けや、取合せや、容器などで、いくらかでも單調さを破れると思ふ。その邊に、妻の機轉が利くかどうかといふことで、人妻としての價値が定まると思ふ。

又、御飯にしても、毎日々々、同じ一定の量を炊くのであるが、その水加減や、火加減で、非常に堅いのが出来たり、お粥のやうなものになつたり、焦げ臭いものになつたりすることは、妻としてのだらしなさを現すことになるのだと思ふ。ところが、嫁ぎゆく頃の娘さん達で、満足に御飯の炊けるものが、幾人あるであらうか？ そこに思ひを走らせると、今の娘さん達には、家事、家政の見習ひといふことが、もつと必要なことだと思ふ。こんなことを云ふと、ある人は、『なに、みんなさうしてお嫁になつてゆくのだ。結婚してから、知らず識らずのうちに覺えるから、心配はない。』と、反駁するかも知れない。然し、さういふことを知らなかつた爲めに、これまで若妻が、いかに多くの苦勞をして來たか、又は、いかに多くの不満を與へて來たかを、よく考へて見るべきだと思ふ。

料理は、ほかのことと違つて、毎日々々のことである。一生付き纏ふことであるだけに、家庭

に與へる影響は、非常に大きいのである。それを、『なんでも食べられ、ばい。』といふやうな遣り方では、到底良人を満足させるわけに行かない。だから娘時代には、料理の訓練はいくらやつておいても、やり過ぎることはないと思ふ。そこへゆくと現在の女學校の割烹の時間などは、殆んど飯事類似であつて、本當に家庭生活に役立つかどうか、甚だ心細い。

然し、この頃は、婦人雜誌などで、料理法についての附録をつけたり、いろんな料理についてのこつなどが掲げられてゐるが、かういふ記事も、讀む人が本當に役に立てるつもりで讀まない、折角の記事も、何の効果もないと思ふ。私の知つてる娘で、胃腸病を患つて入院したときも婦人雜誌の料理の附録を枕許から離さないで、退屈になるとそれをひろげて見て、満たされざる食慾を大いに満たしたといふ話があるが、一般の讀者は、これでは困ると思ふ。

話が前後するが、妻の少しの美貌などは、新婚後三ヶ月も経てば、良人に對する魅力ではなくなるのである。少し位色の黒い妻でも、毎日々々おいしいお惣菜を作つてくれる妻の方が、どれ位喜ばれるか知れない。ピアノが弾ける妻、お琴のうまい妻、活花の上手な妻なども、無論わるくはないが、料理の上手な妻の方が、良人にとつては、より必要な妻ではないだらうか？ 新婚

時代には、鹽辛いお惣菜も、愛嬌ある一景として濟まされるが、それはいつまでも續くものではない。夫婦の間が氣拙くなつてゐても、食ひ物がおいしかつたりすると、つい氣持が和むのではないだらうか？ それと反對に夫婦の間が氣拙くなつてゐた時に、食物がまづかつたりすると、いよいよ良人は、痼癢を破裂させたりするのである。

私が、こんな風に、食物のことばかり口やかましく書くと、或る人はをかしがるかも知れないが、佛蘭西の作家ポール・モーランの作品には、色情の強い人間が必ず出てくるやうに、同國の短篇作家ルキ・フィリップの作品には、殆どどの作品の中にも、食物のことが書かれてゐる。この二つは、人間生活でも、最も本能的なものであつて、ことに夫婦生活に於ては、根本的な要素をなすものである。

妻の趣味で家庭を飾れ

料理に次いで、必要なことは、家庭内の裝飾ではないかと思ふ。これも、料理の場合と同じく、百圓前後の家庭生活では、住宅も制限されるが、どんな貧しい家でも、家の中がきちんと片づいてゐて、品物がその在るべき所に置かれてゐさへすれば、家の中がなんとなく落ついた感じに見えるものである。額面や寫眞などにも、教養深い妻の趣味が現はれてをり、安物のカーテンにも、その色や柄の選び方に、妻の優れた選擇ぶりが見えてゐるなどといふことは、どれ程良人を樂しませるか分らないと思ふ。

一輪挿しの花瓶が、どんなに貧弱であつても、妻がとき／＼挿しておく花によつて、どんなに室内を明るくするか知れないのである。

だから、妻たるものは、絶えず自分の趣味によつて、室内を飾りつけて、その家庭をして、良人の樂しい慰安所、休息所たらしむることに努むべきだと思ふ。然し、かうした趣味は、なかなか一朝一夕では養はれないものであつて、結局は、娘時代の教養がものを云ふのではないだらうか？ その生活程度によつて、裝飾品、家具、調度などに拂ふべき金は制限されてくるが、妻の心遣ひや、高い趣味に依つて、同じ金を拂つても家の中が下品にも見え、上品にも見えてくるの

である。

不潔、不整頓は不和の因

それから、最も大切なのは、家庭が清潔であるといふことである。

趣味の豊富なこともいゝが、どんなにいゝ趣味を有つてゐても、家庭が、いつも取り散らされてゐたのでは、良人にとつて、家庭が鼻につき、つい心を外部に走らせる原因になつてくる。

ある西洋の映畫に、妻は非常に派手好きだが、然し、美しく飾られた應接間に、灰皿が一つも置いてない。亭主は仕方なく、煙草の灰をそこに置いてあるゴルフか何かの優勝杯の中へ落とすと、いふのがあつたが、かういふことは極端な場合であるにしても、家事について妻の心遣ひがないと、いろ／＼な點から、家庭が亂れてくるのである。

又、便所の手拭が、いつも汚れてゐたり、應接間の灰皿にいつも吸殻やマッチの棒がは入つて

ゐたりするといふやうなことは、その家庭が萬事に不行届きなことを證據立てゝゐるやうなものだと思ふ。

さういふ意味で、綺麗好きといふことは、女性の一つの特色になるのだ。女性が自分の身につけた下着類を、常に清潔に保つといふことは、女性の身嗜みの最も肝腎な部分であるが、それと同じく、家庭内をも、妻自身の附屬物だといふ風に考へて、常に清潔にしておくことが必要である。

つまり、家庭の全體に、妻の趣味と、優しい妻の神経とが行き渡つてゐることは、どの位、その家庭を明るく感じのいゝものにするか分らないのである。玄關に、常に履物が亂れてゐたり、テーブルの上に、埃が溜つてゐたり、便所が汚れてゐたりすることは、その家の主婦の不注意やだらしなさを示すものだと思ふ。そんな風では、いくら顔に、白粉ばかり濃く塗つたとて、なんにもならない。

又、自分の衣類は勿論であるが、良人の身に着けるものなどは、いつもよく整頓をして、靴下は靴下、パンツはパンツ、羽織は羽織といふやうに、整然と揃へておくことなども大切なことで

ある。良人の出勤する時に、必要なものが見つからないで、大騒ぎをするといふことは、妻の恥であると思ふ。

家庭科学の心得

良き人妻の資格としては、家庭科学についても、一通りの知識を心得ておくべきだと思ふ。例へば、水道、電気、電燈、ラヂオ、瓦斯、蓄音器などに就ては、妻は出来るだけ研究をして置いて、一寸した故障などは、自分で修理することが出来るやうに心掛くべきである。どうすれば電氣のヒューズが切れないですむとか、それが切れた場合の處置とか、ラヂオや瓦斯や蓄音器などにしても、よし自分でその故障を修理出来ないまでも、どこに故障があるかといふことはすぐに分る程度の知識は、これからの主婦には、是非必要である。又、便所の防臭装置とか、鼠の驅除法だとか、その他、家庭醫學の常識位持つてゐて、常に頭

を働かして、適切な處置を執るといふことは、妻として、母としての責任ではないかと思ふ。と云つて、いち／＼それらの講習を受けるといふやうなことは、なか／＼容易でないが、幸ひと新聞の家庭欄や婦人雜誌には、さういふ重要な記事が絶えず扱はれてゐるのだから、その心掛けさへあれば、容易に修得出来るのである。揮發油、アルコール、重曹、晒粉といつた、どこか家庭でも用ひられてゐる化學製品の性能や成分などに就ても、是非一通りのことは知つておくべきだと思ふ。

經濟生活は妻が主となれ

家庭の經濟は、妻が大藏大臣となつて、良人の收入に應じて、ちやんと根本方針を立て、おいて良人から渡された家事費で巧みにやり繰りをして、多少でも貯金を残すといふことは、家庭生活の將來をどんなにか明るくすることであらう。『自分では儉約するつもりでゐても、どうしても

金が足りない。』と愚痴をこぼす主婦があるが、さういふ場合は、妻の經濟觀念が間違つてゐるやうなことがあるのではないだらうか？ 少くとも、一應はよく反省してみるべきで、妻の心なき浪費が、いつか家政の困難を招いてゐるといふやうな場合は、決して珍らしくないのである。

それから、最も大切なことは、妻が、良人に隠して、金を借りるといふことである。それは、商人との貸借關係でも、非常に慎しむべきことだと思ふ。況して、商人以外の人と貸借關係を結ぶといふやうなことは、妻として、最もたしなむべきことである。良人に黙つて金を借りることは、妻の罪惡の一つと心得べきである。僕の知つてゐる細君は、よく『これは良人には内緒の御願ひですが：』と云つては、密かに借金を申込んでくるが、これなどは、良人の顔に泥をなすりつけるやうなもので、良人の信用を傷けること夥しいと云はなければならぬ。

去年の初めのことだつたが、私の所へ、ある下町のお内儀さんがやつて來た。用件といふのは、『實は、一昨年の暮に、良人のボーナスを百圓餘り落したのです。それを嚴格な良人に云ふことが出來ず、今日まで内緒で遣り繰りしてゐたが、それが積りつもつて、何うにも出來なくなつてしまつたから、一つお助け願ひたい。』といふのであつた。三年間も苦しんで來たことは氣の毒

に堪へないが、それは、最初金を落したといふことが大變な失策だつたにせよ、それを良人に隠してゐた爲めに、いよく何うにもならない羽目になつたのである。とにかく、金銭上のことを良人に隠すのは、危険なことである。いまの世で、金の爲めに身を誤まるものなどは、まあないと思ふが、どんな過ちが起るかも知れないことだけは、十分心得ておいていゝと思ふ。一つの惡事を隠す爲には、他の二つも三つもの惡事を犯すやうな羽目になるのである。

五圓でも、十圓でも、良人に隠して、金の借り貸しは、絶対にしないのがよい。たゞ、自分に與へられた家政費の中から、幾分か節約して貯金をしてゐるなどいふのは、同じ良人に隠してやることでも、決して悪いことではない。それは山内一豊の妻と同じ場合で、良人が萬一、金の必要があるときは、さうした貯金を出したりすることは、良人をどれほど感激させるか分らない。洗濯なども、出來るだけ、自分の手でやるのが大切である。洗濯物を澤山集めて、押入れに押込んでおくなどいふことは、最もだらしなさを示すものだと思ふ。と云つて、すぐに洗濯屋に出すことも禁物である。『あの嫁は、浴衣までクリーニングに出したよ。』と云つて、姑が非難するのを、私は聞いたことがある。だから若妻は、汚れ物が出來たら、なるべく早く方をつけて、良

人や姑の目に觸れないやうにすることが、みだしなみの一つである。それから、良人の衣類なども、なるべく、妻の手で加工して、それを着せるやうにすることは、どんなに良人を喜ばせるか知れないものである。

とにかく、家庭生活を氣持よくするのもしないのも、妻の心掛け一つにかゝつてゐると云つてもよいであらう。然し、人間は、生れながらによく氣がつく者と、鈍い人がある。鈍いことに氣づいて努力する人はまだしもよい方である。自分の心の働きの鈍さ、氣の利かなさを、自覺しないで一生を終る人は、一番この世で困り者である。自分の心の働きの鈍い鈍くないかといふやうなことは、やはり、自分で本を讀んだり、他人の行動を見たりすることに依つて、自省するほかはない。

鶴見總持寺の貫主伊藤道海師は、禪の奥義として、『十二時を使へ、十二時に使はれるな。』といふことを説いてゐるが、人妻たるものは、四六時中、汚れ物を洗濯するやうに、絶えず家庭全體を、明るく、住みよきものになすやう、その一日を使ふことを心掛くべきであらう。

戀愛、結婚、夫婦

戀愛は人生の迷路

『戀愛は一つの病氣である。どんな重い戀愛でも、きつといつか恢復出來る一つの病氣である。』私はこれまで、度々かういふ意見を述べて來た。然しこゝでは、少し角度を變へて、意見を述べて見たい。

戀愛は、一つの病氣であると同時に、人生途上の、最も冒險なる迷路だと思ふ。一生に一度や二度は、誰しも通過せねばならぬ迷路である。そして迷路の特徴は、入口が何處にあるか、どこ

を通れば、一番安全な路に出られるか、さういふことが、少しも決つてゐないところにある。然し、迷路の筋道が分らないのは、歩いてゐる常人だけのことで、これを高い塔の上や飛行機の上などから見ると、容易にその道筋も分るやうに、戀愛もまた、熱中してゐる本人には最も冒險なる迷路であつても、自ら安全なる一定の方向と道筋とはあるのである。だから若き女性は、あらゆる聰明さと心の準備とを以て、この迷路に深く惑ひ込まぬやうに注意すべきである。ところが、現代の青年男女は、戀愛について、何の豫備知識も與へられてゐない。學校でも、家庭でも、戀愛については、完全に目隠しされてゐるし、語ることを避けてゐるのである。その上、映畫や文學に依つて、戀愛に對する魅惑的な刺戟だけが、無制限に與へられてゐる状態である。だから、戀愛に就て、何んの訓練も用意もない子女は、春風に嘶く若駒の如く、戀愛の野を駆けめぐるのである。その揚句は、佛經の『孔雀明王經』に出てくる孔雀のやうに、いゝ氣持ちで山野を跋涉してゐるうちに、日は暮れ、路に迷ひ、やがて狩人に捕へられて、暗い窖の中に放り込まれてしまふやうなことになる。それでなかつたら、溝に陥ちたり、木の根につまづいたりして、いづれは、とんでもない災禍に逢ふのである。これほど、危険なものは又とないであらう。

あらう。さういふ意味で私は、戀愛を非常によいものとは思つてゐない。戀愛の觀方には、故厨川白村博士が説かれたやうに、『戀愛至上主義』といふ主義もある。即ち、Love is bestで、戀愛を人生の最上最善なりとする説である。戀愛は神聖であつて、世の中の道徳や法律より以上のものであるといふ説であるが、然し私には、賛成出来ない。『世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし』と詠んだ昔の歌人の心さへ思ひ出す位、戀愛そのものにもあまり價値を認めない。然し私は、戀愛は結婚の爲めには、必要なものだと思つてゐる。結婚への前提としてのみ、その存在に意義があると思ふ。戀愛は、一時の戯れであつたり、人生の楽しい道草であつてはならない。一時も早く、この冒險極まりない人生の迷路を、傷つくところなく通過して、生活本位の戀愛の道へと進み、やがてそれは、結婚といふ盛儀の準備となすべきである。

生活本位の戀愛

その意味で、女性が男性を愛することは、大切な生活の設計をたてることでなければならぬと思ふ。それは、男性が、一生の専門なり職業なりを選ばくらく、眞剣に相手を選ばべきである。私は現代の女性は、生活本位以外の戀愛はやるなと云ひたいのである。いつの場合にも、生活第一、戀愛第二であつてほしい。

生活第一といふことは、何も物質的に恵まれさうな戀愛をせよといふことではない。眞面目に結婚をしてくれ、一生添ひ遂げてくれさうな相手を選べといふことである。甘美な青春の一刻のために、一生を犠牲にするな、といふのである。

ところが我國では、伊藤博文公のやうな、有名な大政治家までが、『春宵一刻價千金』などと酒興に乗じてよく書いてゐるし、西鶴や近松の文學書には、たゞひたぶるに、戀の爲めに死んでゆく女性があまりに多く謳はれてゐる。小春、お俊、お夏、お七、お染——數へれば際限がない。そして現在の私共の血の中には、かういふ耽美的な夢のやうな憧れが、恰も見果てぬ夢の如く、相當に深く残つてゐることは、常に注意しなければならぬことだと思ふ。

だから、何よりも生活力の逞しい男性を選ばべきである。『色男、金と力はなかりけり。』——近松物に出てくる治兵衛のやうな男性は、決して選んではならない。それには、現代の若い女性は、まだ／＼多くの夢を持ち過ぎてゐる。人生に對する紫色の夢を捨て、生活が何んであるかといふことをハッキリ認識して、戀愛の相手を選ばべきである。

『あの人のためなら、どんな苦勞をしてもいい。』といふ純情は、決して悪くはない。然し、それには、苦勞し甲斐のある男性でなければ、無意味だと思ふ。無能な男の爲めに、苦勞することなどは、愚かしいことであるし、さういふ苦勞を重ねてゐる中には、結局最初の純情も磨り減らされて、相手が厭になつてしまふのである。『竹の柱に、萱の屋根、手鍋さげても……』といふことなどは、口では簡單に云へるが、しかしそれが、一年も二年も續けば、何うなるか。

要するに、お互の生活を豊かにするやうな戀愛が、最も好ましい戀愛である。私の云ふ生活第

一、戀愛第二といふのも、このことを意味してゐることを分つて貰ひたいと思ふ。

誘惑を防止する唯一の方法

誘惑といふ言葉は、いつの時代からあつたのか知らないが、これほど不愉快な言葉はない。何より私は、男女間の問題が、こんな厭な言葉で扱はれることに、義憤を感じるものである。新聞の身の上相談などに、私は誘惑されましたと訴へてゐる女性がよくあるが、私は、その事情を讀まぬ前から、さういふ言葉を平氣で訴へる女性に對して、少しも同情が持てないのである。「男女七歳にして、席を同じうせず。」とは、昔の支那の聖人の云つた言葉である。これは男女間に、過誤がないやうにする爲めの箴言であつた。

然し私は、この言葉を、現代の十七、八歳までの、まだハッキリした理性も判断もつかない年若き娘達の貞操保護の訓言として、いまなほ嚴然として、利用したのである。かういふ貞操を

保護するのは、當人の責任といふよりも、むしろ、両親、兄弟、保護者達の責任だと思ふ。

七、八歳は極端だが、十一、二歳になると、女性は、豺狼の如き一部男性の性的攻撃の目標になり得るのである。女性の身の上相談には、これら十一、二歳の時、性的には東西も分らぬ裡に男性から犯され、大きくなつてから初めてそのことを知つて、悲嘆に暮れるといつた女性が多い。「近所に住むTといふ老人が、いつも可愛がつてくれ、遊びに行くとお菓子をくれるので、私も慕つてゐましたが、ある日遊びに行くとき……。」とか、「お恥しい話ですが、Kが十五歳、私が十二歳の時、仲が好すぎて、子供心の悪ふざけが高じて……。」とか、讀むうちに、慄然とするやうなことが、決して珍らしくないのである。まして、十四、五歳の女學生などと、男の家庭教師などとは、危険性がすでに發火點に達してゐるといつていゝのである。

又、御用聞きだとか、使用人だからと云つて、安心することも、非常に危険である。ストリンドベリーの『令嬢ユリ』などがよい例であらう。この戯曲の主人公は、自分では無意識な性的衝動——いはゆる戀の火遊びから、料理人をからかつてゐるうちに、遂に身を汚されて、料理人の思ふ通りになつてしまふのであるが、日本の上流家庭にも、この『令嬢ユリ』は、少くないので

はないだらうか？

さらに、女性が成長してくると、男子との接觸は、いよ／＼繁くなってくる。ことに職業婦人などになつて男の中で働くことになる、まるで、強力な敵軍の中で、無防備、無武装のまゝで働くやうなものである。職業婦人については、いづれ別項で述べるが、いづれにしても、女性は、あらゆる機会に、貞操を死守する覚悟が必要である。

それなら、いかにすれば男の誘惑から免れるか？ この場合、男の誘惑から脱れることは、貞操を死守するといふことになる。かう考へると、男性からの誘惑防止策は、案外簡単だと思ふ。

それは、他でもない、いかなる場合にも、男性に體を許すなといふ鐵則である。結婚以外には、いかに愛してゐる男性に對しても、又、いかに尊敬し、いかに恩誼の深い男性にも、決して體を許してはならない。男女の肉體的交渉を斷乎として拒絶せよといふのである。

考へてみるがよい。女性が、男に體をまかせなかつたなら、即ち貞操を汚させなかつたら、どこに誘惑といふ厭むべき言葉があるだらうか？ 女性は、貞操を男に與へない限り、戀愛の場合では、大抵は優位の立場にある。それが、誘惑されたとか、裏切られたとか、泣いて訴へるのは、

與へてならぬものを與へた罪である。

貞操を與へぬ限り、かりに戀愛關係がまづく行つたとしても、『誘惑された。』などと、愚かしき引け目を感じる事がどこにあらう。よし心に痛手は残るとも、少くとも無傷のまゝで、五分五分の立場で、堂々と別れられるのである。

そして、新しき愛人を選ぶ資格は、残されるのである。戀愛についての女性の修養は、何よりも第一に、この點にあると思ふ。

何故に處女は尊いか

よく、漫才の夫婦が、高座で、『これでも私は、處女ですよ。』などと云つて人を笑はすが、女性は何故に處女がそれほどまでに尊いかを、一應よく知つておくべきである。

私は、處女時代の貞操は、絶対に清く、保たなければならぬと思ふ。

結婚前の女性が、何故最も尊いかといふことは、貞操的に、純真無垢であるといふことである。貞操の貴いことは、結婚後に於ても變りはないが、結婚前の貞操問題は、彼女一生に持つて廻ると云つてもよい。

英國のエドワード・カーペンターは、『戀愛と結婚の悲劇の中で、最も深刻なものは、女性が最初にその身をまかせた男は、その性格がどうであらうと、女の心の中に、最も深い、忘れ難いものを残すと云ふ事實である。』と云つてゐる。

トルストイの小説『復活』のカチューシャや、ハーデイの『テス』とか、その他東西古今の文學を通して見ても、女の薄倖や悲劇の出發が、大抵は結婚前に男に貞操を汚されたことに原因してゐる。

それに醫學的立場から見て、『一度婦人が

交りをする、肉體の血液に多少の變化を

來す。』といふ説さへある。この説の當否に私はあまり拘泥したくないが、少くとも、それほど純真無垢なるものが汚されるといふことになるのだと思ふ。

結婚前の女性が、『私は處女である。』といふことは、嫁ぐものゝ資格として、これほど大きな持

參品はないと思ふ。どんなにか人妻として、立派で、心強いことか知れない。これは何よりも彼女自身を慰め、かつ精神的にどれほど勇氣を與へるか知れないのである。

それに反して、もし處女性を失つてゐたらどうであらう。たとひそれを祕密に出來たとしても、『もし、萬一發覺したらどうしよう。』といふ不安が、弱點が、彼女の一生の惱みの種となる。延いてはその惱みが、良心の苛責となり、心情を暗くしないと誰が保證し得よう。但し私は、まだ性的知識に目覺めない少女が、男子の暴力によつて處女を汚された場合に限り、別問題として、少しの疚しさもなく、處女として認めてやるべきだと主張するものである。

男性から求愛されたら

そこで、ある年齢に達した女性は、いつ、いかなる場合に、男性から求愛されたり、求愛の手紙を受取らぬものでもない。かゝる場合、どうすることが一番聰明であるであらうか？

無論、見も知らぬ青年から、だしぬけに求愛されたり、ラヴ・レターを渡されたやうな場合は、大體に於て不良青年の誘惑と見て、その場で峻拒すればよい。然し、それまでに相當の知り合ひであつたり、何かの機會で面識のある青年であつた場合は、一概に相手を不良扱ひにすべきではない。相手をあまり警戒することは、折角の良き男性をも見逃すことにならぬとも限らないからである。

と云つて、面識のある青年が、いづれも戀愛の相手として資格があるとは云へないのである。そこで、いかに選擇すべきかといふ問題になるが、これは、その女性がいかに聰明であつても、自分一人で判断せずに、第三者に相談して、その意見を訊くのが一番よいことである。

かういふ場合の第三者としては、姉妹とか親友とかもあるが、最も適任者は母親だと思ふ。母親はその女性の性質もよく知つてゐるので、相手の青年の性格などよく比較も出来るし、長い間、多くの男性を見て來てゐるので、比較的冷靜に、相手の長所や短所を見抜くことが出来るであらう。この意味で、もし母親がたよりなく思ふやうな場合は、學校の先生などに相談するのもよい。

戀愛航行術

然し、自分の姉妹や同年輩の親友に相談することは、多くの場合誤を起し勝ちである。それは相談を受ける女性自身が、まだ戀愛崇拜者だつたり、男性を見抜く力がなく、たゞ男性の言葉や態度なりに、酔つてしまふ恐れがあるからである。これでは、戀愛の審判官ではなく、ファンになつてしまふ。かういふ意味で私は、戀愛上の相談は、必ず自分より目上の人にすべきだと思ふ。

『われ／＼は、あらゆる點で、最も熟達せる人生の航海者でなければならぬ。よし、いかなる怒濤、いかなる風雨が襲ひかゝらうとも、帆綱をしつかと握つて、難破せぬやう航行しなければならぬ。』

これは、女性と戀愛の爲めに、一生悩み通したとも云ふべきストリンダベリーの言葉であるが、

現代の女性もまた、戀愛が、人生の行路上、避けることの出来ないものならば、よし、いかなる怒濤、いかなる風雨が襲つて来ようと、それに溺れぬために、熟達せる航海者とならなければならぬと思ふ。と、云つても、戀愛に對して悪賢くなれとか、悪達者になれと云ふのでは無論ない。私は、前に、男性の選擇に就て意見を述べた。然し、いくら用心しても、人間の選擇に誤りがないとは、保證出来ない。又、最初は信用して、戀愛の相手を選んだとしても、その後、時間の経過に従つて、その青年がどんな風に、變化しないとも、限らない。生活的能力があつても、人格上面白くないとか、人格に缺けるところなくも、生活力が薄弱だとかいふやうな青年も出てくるであらう。なかには、半年も交際してから、ひどい喰はせ者であることが分ることもあらう。かういふ場合、その相手の女性は、『誓ひ』とか、『固い約束』とか、『戀のため』とかいふやうなことは、少しもこだはらずに、不適當な相手の青年から、一日も早く、引きさがることが必要なことである。それを、ぐづくしてゐて、自分の生活を、一生を犠牲にするやうなことは、決して聰明なことではない。さういふ戀愛は、正しい戀愛ではない。やがては、自分を不幸にし、同時に、相手の男性をも不幸に陥れるからである。

だから私は、これからの男女は、戀愛の去就について、もつと簡単な氣持で出来るやうにしたいと思ふ。これまでの戀愛は、あまりに『深なさけ』的であり過ぎた。そのために、どんなに一生涯を不幸にしたものがあるか分らないのである。繰返して云ふが、どんな場合にも、生活第一、戀愛第二である。

別れても相手を劬はれ

たゞこゝに忘れてならないのは、一度戀愛の仲になつた同志は、たとひ何ういふ事情で別れるにしても、相手の心を出來るだけ、傷けないやうにつとむべきだと思ふ。相手の男が氣に入らなくなつたからとて、急に姿を隠したり、手紙の返事を書かなくなつたりするやうなことは、いけないと思ふ。それよりは、直接會ふか又は手紙で、十分こちらの考へを述べて、よし相手が納得しないまでも、意をつくし、潔く別れるといふことがよいのである。これこそ、正しい戀愛道

の一つであらう。

この場合、大抵の男は、女性の持ち出す『別れ話』を、素直に理解し、聞き入れないかも知れない。然し、それだからと云つて、折角の決断をにぶらせて、又も縊を戻すといふやうなことはいけない。女性はあくまでも強く、自分の信念に向つて進むべきだと思ふ。又、それが正しい方法なのである。

なほこゝに、或る婦人が、自分の従弟と戀愛的婚約の間柄であつた女性に宛て、従弟の不始末から破婚になつたことを、心から慰めてやつた手紙がある。参考の爲めに、次ぎに掲げて見よう。

御手紙有がたく再三、拜讀いたしました。此の度の事につきましては、御傷心の程も、さこそと、御察し申し上げます。又、私といたしましては、種々おわづらはしさのみ、桓夫（従弟）がおかけいたしました御様子で、何とも申しわけなく、唯々、心からお詫び申上げる次第でございます。御手紙の内容では、細々とした事のいきさつは知るよしも御座いせんが、お心もちの程はもう、よくわかります。あなたの、言はうとなさる御心の内は、はつきりとわかり

ます。それにつけても私は、まだお目にはかかりませんが、お年若い貴女のけなげな御氣もちに、心から敬服いたします。そしてよくも、この度の様な、心の大事に逢つて、強くなへ忍んで下さつた事を悦ばしく、感謝いたします。桓夫としましては、とかくするくべつたりの、投げやりな、いつも、何かに依りかゝつてゐたい様な、意氣地のなさ、その場のがれの小さないつはりの衣をすつぱりとぬぎすて、雄々しく發奮すべきで、生られぬの、死ぬのと云ふ事は、もう現代では、容れられない弱々しく心の持主です。それは私からもよく、あの子へ申してやりますが、死ぬ氣になつて、やれない事は世の中には一つもないではありませんまいか。私ども、若い頃には、うれしいにつけ、悲しいにつけ、良きにつけあしきにつけ、いつも泣き、かなしみ、崩れたりしたのですが、感情ばかりでは、決して、世の中は渡れません。桓夫は、幼ない頃より両親を失ひまして、親身と申しましては、故郷では私一人で、その私にすら、貴女との御縁組も、くはしい話は何もいたしませんし、東京遊學中の日常も、私へは、いゝかげんな報告しかされてゐなかつたらしいのです。叔父亡き後は、微力ながらも、兄も母も面倒を見てゐたのですが、御承知通りの、親ゆづりのルーズな性格で、母達も、ほとほとあきれて、

私の方へ幾度も、桓夫へ注意する様に、申してまゐりました。その都度、桓夫へも忠告はいたしますが、一切馬耳東風で、暖簾に腕押しうでおの始末しまつでした。(中略)

桓夫も、貴女によつて救はれる事と、心うれしく存じてゐましたが、やつぱり、御迷惑のみおかけした上、御母様のお怒りにふれるやうな不都合をいたしました様子、さんきのいたりで、縁につながる私も、全く、御詫びの言葉も知らぬ次第で御座います。たゞせめてものよろこびは、貴女が難局に立つて、冷静な態度で、貴女のとるべき道をとつて下さる事です。どうぞ、神の試練と思召し、現代の婦人らしく、敢然として、生きて頂きたい、そして御母様にも、御安心おさせ遊ばす様、遙かに祈り上げます。戀愛は決して人生の全部ではないのですから、今は、おつらい事でせうが、あんな不束な男の事は、サラリと、思ひ捨て、強く明るく生きて下さる様、私からお願ひいたします。(下略)

この手紙は、この倍くらゐ長いものである。筆者は、女學校を出ただけの方だが、情理兼ねつくして、實に胸搏たれる名文である。もつともこれは、戀人當事者の手紙ではないが、假りにも戀を囁きあつた同志なら、別れるときには、これ位の誠實を籠めた態度を取るべきだと思ふ。

いくら將來を誓つた同志だからとて、その後何かの都合で別れるのは、決して咎むべきではない。たゞ、好きなときは、思ひきり馴々しくしながら、嫌ひになると、何んの挨拶もせず知らぬ顔をしてゐるのはいけないことではなからうか。よく結婚してから、娘時代の戀人だつた男から、苦情を持ち込まれたり、横槍を入れられて思はぬ悲境に泣く女性があるが、それは、前の男との戀愛の結末をよくつけて置かないためである。

『口をぬぐつただけではいけない、尻をよくぬぐへ。』といふ諺があるが、戀愛のしめくゝりをつけておけば、そんな卑劣な男が現れても、一言の下に弾ねつけられるし、よし夫に知られても、申開きは立つわけである。

結婚は楽しき結末ではない

結婚は、男女にとつて、人生の重大事である。然し女性にとつては、男性にとつて重大事であ

るよりも、十倍も、二十倍もの重大事である。西洋の諺に、『結婚は、男性にとつて一つの挿話であるが、女性にとつては彼女のオール・ヒストリー（全生涯）である。』といふのがある。男性は結婚に失敗しても、他に仕事があり、趣味があり、道楽があり、いろいろ結婚の失敗を償ふ道もあるが、女性は結婚に失敗すると、もう何等の枝道もない。昔から、『悪い女房は一生の不作である。』といふ諺があるが、『悪い亭主は一生の饑饉である。』とも云へると思ふ。

又、セント・ジョン・ハンキンといふ英國の劇作家は、結婚で了る芝居を評して、『結婚が芝居のめでたき結末であるといふのは、間違ひも甚しい。結婚の次ぎには、夫婦喧嘩の場面もあり、離婚の法廷の場面もある筈である。まことに結婚は安心すべき結末ではなく、新しき事件、新しき紛擾の始まりであると云つてもよい。戀愛からそこへ漕ぎつけて行つて、吻つと安心すべきところではない。』

と述べてゐる。まことに至言ともいふべきで、ある一人の男が、ある一人の女と一生一緒に住むといふことさへ、考へて見れば不思議なことで、何十年もの間、變らざる愛情を以て、新鮮な性愛生活を續けるといふことは、至難な大事業に相違ないのである。

それ故に私は、若き人妻は、消極的に、良人の愛と庇護を受けて、徒らに安心すべきではなく、渾身の思慮と愛情を以て、結婚生活の明るき営みのために、幸福なる完成のために、不斷の努力を拂ふべきだと思ふ。良人は、妻を愛すべきものと云つたやうな、手放し式な定石に安心してゐると、いつの間にか良人の心は、天の一角に向つて飛び去つてゐるかも知れないのである。さういふ意味で、人妻も、ある程度の正しき愛情技巧によつて、良人の愛をつないで行くべきであると思ふ。誠心誠意良人を愛すればとて、退屈し易き現代人の心をつなぐには足りないのである。

結婚は焦るな、そして焦れ

最近聞いた話だが、東京のある高女の先生が、生徒に向つて、『皆さんは、決して結婚を焦つてはいけませんよ。理想な方をよく選擇してから、おもむろに結

婚すべきです。ところが、皆さんのお母様やお父様は、皆さんが女學校を卒業すると、すぐにも結婚させて、一日も早くお孫さんの顔を見たがつて焦り過ぎるやうですから、よほど皆さんの方でしつかりしなければいけません。』

と云つたといふ。これは尤もな話で、女學校の先生がこんなことを生徒に教へるやうになつたのかと、大いに感心したことである。

少くとも、これまでの娘の親は、まるで品物でも片づけるやうに、娘を早く嫁にやることを考へ過ぎた嫌ひがありはしないだらうか？

『蟲がついてはならない。』といふやうな心配から、とにもかくにも、早く縁づかせて親としての安心をしたい氣持から、つい娘自身にとつて、それが良縁であるかどうかといふことは、あまり顧られない場合がありはしなかつたらうか？ これでは、あまりに親として、無責任と云はねばならないと思ふ。さういふ意味で娘達は、兩親の勧める結婚談に對して、一應の吟味をすべきだと思ふ。

ところが、現代は、年と共に結婚難が、いよゝゝ激しくなつたことを知つておかねばならない。

その原因は、つまり結婚の相手である男性が、就職難とか、折角就職はしたが収入が少ないとか、即ち結婚生活をするだけの經濟力に乏しいためである。男性が結婚出来なくなつてゐるから、従つてその相手である女性も、結婚出来ないのは當然である。

それでも、豊かな家庭の娘は、親や親類などが心配して、嫁入りを熱心に探し廻るから、そのチャンスも多いが、家庭が豊かでなくて、職業婦人などになつて家の手傳けをしてゐる場合は、日々の生活に追はれて、つい二十歳頃から、二十四、五歳までの青春時代をいつとはなしに過してしまふことになる。その爲めに、オールド・ミス（老嬢）になつて、ヒステリー氣味な、變質的な女性になることは、非常に歎かましいことである。だから、ある特殊な職業についてゐる女性とは別として、大體二十二、三歳、おそくて二十五歳位までには、結婚するのがよいと思ふ。

そこで、それらの結婚難を切り抜ける方法として、夫婦共稼ぎがある。處が、現在でも、『結婚したら、勤めなんかに行き度くない。』といふことを聲明してゐる職業婦人が多いやうだが、間違つてゐる考へだと思ふ。結婚は決して轉業ではないのである。職業生活に倦怠や疲勞を覺えた婦人の中には、『いつそ、勤めをよして、結婚してしまはうかしら？』などと云ふものもあるが、結

婚とは、生活に疲れた女性の避難所では決してない。現在の男性は、夫婦共稼ぎを大いに希望してゐる。これは男性が意氣地がなくなつたからではなく、現代社會の經濟事情がしからしめるのであるから、私も賛成である。

結婚難を切抜ける、もう一つの方法は、女性が、もつと積極的に、結婚のチャンスを掴むべく努力することである。

日本の女性は、非常に引込み思案で、自分から結婚の相手を探すといふやうな場合は、非常に少ない。戀愛はするが、結婚の相手を選ぶやうなことはしないのである。そこへ行くと、歐洲やアメリカでは、結婚年齢に達すると、娘自身が相手を探すばかりでなく、母親までが一緒になつて、娘の爲によい良人を探さうとして、血眼になつてゐる。日本の母親などは、こんなことに血眼になることを恥だと思つて、せい／＼娘の嫁入り先を見つけてくれさうな人の處へ、菓子折でも届ける位が關の山である。

然し、自分の一生を托する杖とも柱ともなるべきものを求めるのであるから、どんなに一所懸命になつても、決して恥ではないのである。自分の良人として、一生を托するに足る男性を、は

つきりと心に描いておいて、なるべくそれに近い人物を得ようと努力するのは、決して間違つたことではないと思ふ。たゞこゝで問題は、何ういふ男性が、自分の良人として、十分な資格があるかといふことを鑑定することである。それがはつきりしてゐさへすれば、下らない不良少年や不良青年に引掛るやうな危険だけでも、少くなるのである。

と、云つて、若い女性に向つて、露骨に男性に對して求愛しろ、求婚しろと云ふのではない。日本の女性は、一般に、まだ／＼男性を批判する力、批判する眼が、發達してゐない。それまでは、矢張り戀愛の場合と同じやうに、男性の鑑定や、選擇は、年上のものか、母親と相談の上に行ふことが一番過ちを少くするわけである。

結婚後最も大切なことは

女性が、結婚の道には入るには、二つの道がある。一つは、戀愛結婚であり、一つは見合ひ結

婚である。

戀愛結婚と、見合ひ結婚とで、どちらが良いかといふと、出来るならば、結婚前に戀愛して、その結果として結婚するのが理想的である。然し、それは、もしもその結婚に失敗した場合、自ら自分の責任として、その不幸を諦められるといふ點で良いといふのであつて、いまのところ、この二つの形式のうち、どちらがより好結果であるかは、實際の上では、分つてゐないと思ふ。だから、どちらが良いとか、悪いとかいふことよりも、戀愛から結婚した場合には、いかなる心掛けが必要か、見合ひ結婚の場合には、最もどういふ心得が大切であるか？ その形式によつて、それぞれの用意が大切だと思ふのである。

夫婦生活は、性的な結合をもつてはじまるものである。これは、戀愛結婚でも、見合ひ結婚でも變りはない。いはゞ結婚生活の定義である。

ただ違ふのは、戀愛からは入つた結婚生活は、男女双方に、すでに『愛』が芽生えてゐるが、見合ひ結婚の場合には、それがないのである。たとひ、芽生えたとしても、あるかなきか位の程度のものである。それなのに、一夜にして、すべてのものを相手の男性に捧げなければならぬ

のである。さう考へると、大きな恐怖さへ湧いてくるのではなからうか？ そこで私は、見合ひ結婚をする花嫁に向つて、一日も早く、良人を愛するやうに努力せよとすゝめたいのである。

『愛より入りて肉にすゝみ、肉より出でて愛にゆく。』とは、マホメットの言葉であるが、見合ひ結婚は、『肉より出でて愛にゆく』べく、つとむべきだと思ふ。愛もないのに、肉體を委せるといふことは、純真な若き女性にとつては、苦痛であるかも知れない。然し、ものは考へやうで、幾千萬人あるか知れない若き男女の中から、二人が選ばれて人生の新しい旅に出發するといふことは、よく／＼の縁と考ふべきである。それは、見方によつては、この人生といふものは、絶海の孤島に在る如く、淋しいものだ。眼をいろ／＼な方面へ向けるから、慾や迷ひが出てくるものだが、孤島で年若き男性と女性がめぐり合つたとしたら、どうであらうか？ 愛情とか、戀とかいふことよりも、先づ二人は、これから生きてゆく爲めの、人生の協力者になるであらう。最も親密な伴侶となるであらう。この場合、性格の相違とか、趣味の相違とかいふものは第二のものとなつてくる。そして、一日も早く精神的な結合へと進むべきである。少くとも見合ひ結婚をした女性は、この心持ちが一番大切だと思ふ。

また、戀愛からは入つた結婚生活は、『愛』といふ如き精神的なものばかりを追究しようとするに、一時も早く、愛情や性慾を、實際的に生活化しなければならぬのである。

そこで、夫婦の愛情を生活化するといふことは（こゝまでくると、戀愛結婚も、見合ひ結婚も同じものになつてくる）——夫婦が手に手を取りあつて、一つの目的に進んでゆくことである。妻は、良人の出世を計つて、その爲めに内助の功を積むとか、自分達の商賣に夫婦揃つて、懸命に共稼ぎを續けるとか、實生活の目的に向つて、ピッタリ一致して精進することが、何よりの務めである。

それを、『私の良人は愛が足りない。』とか、『愛すると口に出して云つてくれない。』とか、まるで戀知りそめた小娘のやうなことに、いつまでも拘泥してゐるやうでは、到底幸福なる結婚生活を営むことは、覺束ないと思ふ。

喧嘩夫婦の妙味

世間には、喧嘩夫婦といふものがある。いつも喧嘩ばかりしてゐる夫婦で、何か一寸したことにも良人が怒鳴り出すと、妻の方も負けずに云ひ返す。はたで見ると、まるで犬猿のやうな夫婦である。だからと云つて、第三者が、『君の細君は少しひど過ぎるね。』とか、『お宅の旦那様も怒り過ぎますね。』とか、同情するつもりで云ふと、その夫婦は、ひどく不機嫌になる。といふのは、この二人は、實は夫婦仲が非常によいのである。妻は、この世の中で、誰よりも良人を信頼し、良人は、自分の妻を誰よりもたよりにしてゐるのである。

『そんな馬鹿な話はない。』——と、年若き女性などは思ふかも知れないが、その實、世の中にはこの種の喧嘩夫婦が非常に多いのである。

と云つて喧嘩夫婦が良いといふのではないが、結婚生活といふものは、その位、複雑なものな

のである。だから、女學校あたりで教へられた單純な考へで、結婚生活にのぞむといふことは、非常に危険なことである。

愛情を速かに、生活化せよ！ 肉の交りを、速かに愛情化せよ！ そして大きな眼で、大きな心で、夫婦生活の目的に向つて、力を協せて進めばよいのである。『おい』と、『あなた』の言葉にどれほどの相違があるか！ 夫がいゝ加減に放言する『お前を愛してゐない。』といふのと、『お前を愛してゐる。』といふ言葉に、果してどれだけの差があるか？ かへつて、男の口から『あなたを愛してゐます。』などと、ぬけぬけ云ふ言葉にこそ、多くの虚言が含まれてゐるものである。然し妻は良人のそのとき々の言葉などを、いちゝ氣にかけてゐるやうでは、本當の夫婦生活の悦びと、楽しみは、到底一生涯かゝつても、味得出来ないであらう。

良人の愛に甘え過ぎるな

俗謡の中には、なか／＼人情の機微にふれてゐるものが多いが、『風は帆まかせ、帆は風まかせ、わたしや、あなたの心まかせになる身ぢやないか。』とかいふ文句があるやうだが、これなどは、そのまゝ夫婦生活の妻の心構へとして、大いに訓へられるものだと思ふ。

喧嘩夫婦があるからと云つて、そんなものを結婚早々、眞似されては堪らない。忘れても人妻たるものは、良人の性格や趣味をよく心得て、よく仕へ、よく劬はり、よく慰めることを努めねばならない。新婚當時の良人の寛大さに甘え過ぎて、妻としての心の帆綱を弛めるから、そこに争ひが起きてくるのである。

これは有名な話だが、水戸黄門がお忍びである旅館に來ると、そこでひどい夫婦喧嘩がはじまつてゐる。すると黄門は、例の調子でその喧嘩の中には入つて行くと、喧嘩してゐる夫婦に向つて、『わしが、仲直りをさせてやるから、二人とも結婚式をあげたときの支度をして出て來い。』と、嚴命された。旅館の喧嘩夫婦は、何んのことか分らないが、『余は水戸黄門だぞ！』といふお聲がかりに恐れをなして、恐る／＼結婚式當夜の式服を着て老公の前に出ると、黄門はからからと笑はれて、

『どうぢや、二人とも結婚の晩は楽しかつたらう。そして、いまのやうな悪口雑言を云つたわけではあるまい。夫婦といふものは、いつも結婚式の晩のことを忘れなければ、仲睦じくゆくものだ。』と、懇ろにさとされたといふことである。

妻の鈍感さ、粗暴さが、良人の心を爆発させるといふことは前で述べたつもりだが、まだ爆発させる良人の方が始末がよい。中には妻への不満を、少しも口に出さずに黙つてゐる人があるが、だんだん辛抱しきれず、内攻してくと、一度に大爆発するか、心を外に走らせることになる。この方が、はるかに夫婦生活にとつての危機である。だから人妻は、常に、良人の感覚や感情を傷けないやうに、心をくばる必要があると思ふ。

例へば、寝具などでも、いつもシャツが汚れてゐる。夜着の襟元にかけてある白いカバーが汚れてゐる。それに觸れると、何かじめ／＼した冷たさを感じるといふやうなことは、良人の愛をいつの間にか冷めさせるものではないだらうか？ 蒲團はたとひ木綿でも、銘仙の衾げたのでもいいが、シャツやカバーは常に糊のついた新鮮なものがかゝつてゐるといふことは、妻の大切な心構へである。

良人の靴がいつも磨かれてゐると、良人が注意しなければ磨いてないのでは、良人が家を出かける時の氣持を、明るくもし、暗くもするのではないだらうか？ 良人が會社を出て家路に向ふ時、頭に浮んで來る家庭の有様が、常に良人を快くすると、何かじめ／＼した感じや、ごたく／＼した感じを起させるのでは、どれ程、夫婦生活に影響があるか知れないのである。こまかい點をあげれば際限がないが、時々良人の立場になつて考へ、良人を楽しくするやう務むべきであらう。

自分が、妻としての義務や、身だしなみを十分にせず、たゞ良人から愛されることのみを要求するなどは、甚だ蟲のよい考へだと思ふ。

良人の心を永久に繋ぐ法

何うしたなら、良人の心を、いつも自分に繋ぎとめておくことが出来るか。それは、以上に述

べた妻の心構へや、身だしなみの他に、愛情の技巧とか、性的な問題があるが、ことに忘れてならないことは、妻は、良人に對して、常に精神的にも肉體的にもある未知數を持つてゐてほしいことである。

こゝで、精神的な未知數とは、常に、彼女の修養と、不斷の努力によつて、新しき要素を取り入れることである。これは、多忙な主婦としては、かなり難かしいことではあるが、心掛け次第では、決して不可能なことではない。

又、肉體的な未知數とは、女性がいつまで來ても、羞恥感情を捨てないといふことである。結婚後、五年が來ても、十年が來ても、花嫁のときの如く、羞恥感情でその肉體をつゝめといふことである。

羞恥感情を忘れたクレオパトラは、それを持つてゐる田舎少女よりも、魅惑的ではなく、一娼婦と何等變ることがなくなるであらう。ギリシヤ神話のトロイの皇子パリスが、ヘラ、アテネ、ヴキナスの三女神の中で、結局ヴキナスに愛をさしげ、金の林檎を與へたのは、ヴキナスが『羞恥の帶』をしめてゐたからだと云はれてゐる。心の底、肉體の底に、何かしら、神祕的なものを

有つてゐることは、男の心をどんなに強く惹きつけるか知れないものである。

私はかつて、『閨のお慎しみの事』といふ徳川時代の花嫁訓を讀んだが、それには『人妻たるものは、一生涯、新婚初夜の如き氣持で、床には入れ。』と書いてあつた。古語に、『夫婦別あり。』とあるのは、その羞恥心ではないかと思ふのである。

前の、水戸黄門の話もそのことを多分に指してゐるのではないだらうか。とにかく夫婦は馴れ易きものである。

従つて、良人に對して羞恥感情を失ひ易きものである。常に花嫁の如き恥らひを以て、床には入ることは至難のことであるかも知れない。しかし、その至難のところ、若き人妻としての、たしなみがあるのではなからうか？

近頃、夫婦生活に於ける、愛情技巧がいろ／＼と説かれてゐることは、悪いことではない。しかし、性的な技巧と、羞恥感情とを混同して、羞恥といふ女性の神祕的な垣根まで、取り拂つてしまふやうなことは、よく／＼慎まねばならない。

『夫婦別あり。』といふ古語は、『こゝに唯一つの垣根あり。』と書き替へてもよいのである。

母、姑、小姑

愛兒を守る重大要點

妻となる以上、すぐ母となる覺悟がなければならぬ。ところが、又しても女學校教育に弓を引くことになるが、女學校で教へる育兒の知識などは、これまた飯事にも及ばぬ程度のものである。

私は、母たるものは、子供が五歳位になるまでは、子供の生命を大事にするといふことが、一番大切な心掛けだと思ふ。精神の陶冶とか、環境教育だとか、いふことよりも、この年頃までは、

あらゆる手段を盡して、子供を病氣にしないやりにすることが大切である。

だから、少し位極端な云ひ方かも知れないが、五歳位までは、子供を動物と考へてもいいから、あらゆる方法を講じて、その生命を保つやうにとめることが必要だと思ふ。精神的なことは子供が物心ついてから氣をつけてやればよい。それまでは、たゞ一個の愛する生命として、その生命を、出来るだけ強健に成長させてやるといふことが、母の心掛けである。

子供が、命を取られる二つの原因は、肺炎と疫痢だと私は思つてゐる。私の周囲などにも、この二つの病氣の爲めに、折角の愛兒を死なして、悲歎にくれてゐる人達が、非常に多いのである。だから、この二つの病氣に罹らせないことが、子供の命を守る重大要點だと思ふ。

もつとも、肺炎と疫痢の他にも、命取りの病氣がないわけではない。然し、腦膜炎などいふ病氣は、人爲的には容易に防ぎ切れないもので、其の場合には天災と諦めることも出来るが、肺炎と疫痢だけは、母親の不注意が原因する場合が多い。

疫痢は夏が主で、冬は肺炎が主である。肺炎は、風邪を引かせないことで防げるのである。たとひ引かせたとしても、手當さへ十分であれば、この死病にまで悪化させないで済むのである。

それには、少し寒い時には、絶対に子供を外へ出さないやうにすることが大切である、私は、冬の寒い日に、小さい赤ん坊を風に吹かせながら連れて廻る母親を見る度に、人事ながら、はらはらす一人だ。醫者はいろく云ふが、子供に抵抗療法などは禁物だと思ふ。子供を寒い風に慣らすなどいふことは、八歳になつてからでも遅くはないのである。

寒い日に、子供を連れ出す場合は、絶対にマスクをかけさせた方がよいと思ふ。子供が厭がつても、なるべくさせた方がいゝ。少しでも熱があり、咳があれば部屋の中に寝かして、吸入をするとか、湿布をするとか、あらゆる手段を講ずべきだと思ふ。或る人は、『子供をあまり大袈裟に育てゝはいけない。』などと云ふ人もあるが、それは程度の問題であるし、抵抗力の養成なども、七、八歳以後のことであらう。

疫痢なども、食物を絶対に注意すべきであつて、私などは自分の子供が五つくらゐになるまでは、玉子以外は殆ど何も食べさせなかつた。その爲めに、小さい時は身體の榮養が足りなかつたやうであるが、併し今では、三人の子供とも普通の家庭の子供より、すつと丈夫になつてゐて、私の長男などは、いま十五歳であるが、五尺五寸以上で、十六貫に近い。この長男の場合も、五

つくらゐまでは、果物などは一切食べさせなかつた。子供の時から、どんな物でも食べさせる両親がゐるが、私は不賛成だ。

小兒科専門の醫者では、この頃、まだ満一歳にもならぬときから、バナナなどを少量づつ食べさせるといふ者もあるさうだが、これなどは、子供をいかに丈夫に成長させるかといふ研究範圍を出ないものだと思ふ。その爲に或は子供の發育が非常によいかも知れない。然し百人に一人は、その爲めに疫痢になつて死ぬかも知れない。疫痢の治療が完全に進んでゐないのに、さういふ冒險はやるべきことではないと私は思つてゐる。

又、疫痢を起す子供の中には、近所に遊びに行つて、バナナとか、櫻んぼとか、その他の果物などを貰つて、その爲めに罹つたといふ子供がゐる。さういふ意味で、近所の子供などには、絶対に物をやらない方がいゝ。本當に、近所の子供の生命を大切に思ふ者は、近所の子供などに、何か食べ物などをやるべきではないと思ふ。

それと同時に、自分の家の子供にも、近所へ行つては決して物を貰はないといふことを教へておく方がよい。ところが、或る一部の主婦などは、こちらでさういふことを子供に教へておくと、

何か自分の家が輕蔑されたとか、『交際したくないからだらう。』とか、變に僻んで取るものが、ないでもないが、これは育児の立場から、お互ひに、よく諒解しあつて、慎しむべきことだと思ふ。萬一、子供が疫痢や肺炎に罹つたときの手當は、日頃から十分に心得ておいた方がよい。罹病してから、『家庭醫學』の本をひらいて見るやうでは、おそい。疫痢などは、その徴候らしい状態のとき、ひまし油を服ますか服ませないかで、かなり豫後が違ふやうであるから、さういふ心掛は十分にされた方がよい。疫痢、肺炎以外にも、デフテリア、猩紅熱、麻疹、百日咳といふやうに、子供の病氣は澤山あるが、かういふ病氣に對しても、やはり一通りは、その容態や手當などについて注意した方がいいと思ふ。

殊に田舎などでは、醫師が猩紅熱をデフテリアと間違へて、デフテリアの注射を幾本も打つたなどといふひどい誤診もあつたさうである。又、『麻疹や百日咳は、誰でもかゝるのだから、病氣の中にはは入らぬ。』などと呑氣なことを云つてゐる人もあるやうだ。そして、子供が死んでから、狐や狸の祟りだなどと云つて騒ぎ出すやうなこともあると聞いてゐる。

だから、母親は、何よりも子供の病氣に對する知識を、殊に疫痢と肺炎との研究をしておくこ

とが、非常に必要である。

學校に行く子供を持つ母へ

子供が、小學校へ行き出してから、小學校の先生に依頼して、小學校の先生を尊敬し、先生の云ふことをよく守るやうに、家庭でも教へた方がよい。かりにも先生の悪口や、非難めいたことは、子供の前では斷じて話してはならないと思ふ。小學校の先生とて、神様ではないのだから、十人十色いろ／＼な方もあるだらうが、と云つて、子供の前でその人物批評をすることは、百害あつて一利もないのである。

次に、學習の相手としての心得だが、ものを教へるよりも、勉強の癖をつけることが大切である。母から教へてやるこの勉強の癖といふものは、その子供にとつて、一生の良き習慣となつて役立つものである。だから、頭のいい子も勿論であるが、頭の悪い子でも、自分で努力する

といふ習慣だけは、常によく指導して、つけさせておいた方がいゝのである。

小學校の成績などは、あまり気にしない方がよいと思ふ。小學校で出来ないでゐても、體さへ丈夫であれば、中學校へ行き、大學へ行つてから、出来るやうになる子供は幾人もゐる。だから、小學校で出来ないからと云つて、親が絶望したり、子供にもさういふことを口にしていけない。子供に一生の希望や自信を失はせてしまふやうなことにでもなれば、大變なことになる。

又母親は、せめて小學校の時くらゐは、子供が學校で教つてゐる教科書位は、一緒になつて勉強して、子供の復習の相手にもなれば、豫習の相手にもなるといふことはいゝことである。女學校位卒業してゐれば、小學校の六年くらゐの子供とは一緒について行くことが出来るのではないかと思ふ。

そして、子供も、この頃になると、そろ／＼一個の人格として、認めてやらねばならない。だから、子供を叱るよりも、いゝ機會を掴まへて、褒めてやるのが肝腎だと思ふ。はたから、いちいち小言を云つて、口やかましく注意をするといふよりは、子供が自分自身を信じ、自分自身で發奮するやうな力を、培つてやるやうにすることが必要である。

親が、子供を滅茶苦茶に叱ると、子供は自信を失つてしまふのではないだらうか。それよりは、子供に自信をつけるやうに、子供が自分自身の才能を信じて出来るやうに指導してやることの方が何よりも大切なことである。

中等學校へ行けば、なるべく將來の希望は、子供自身に決めさせる方がいゝと思ふ。父が醫者であるから醫者にするとか、父が軍人だから軍人にするとかいふやうなことは何うかと思ふ。子供は、子供の才能によつて、子供自身にその將來を選ばさせた方がよい。少くとも兩親は、その良き相談相手となつてやる程度がよいのである。

母は人妻であることを忘れるな

母にとつて、いくら育児が大切だからと云つて、子供にはかりかまけて、良人の存在を忘れてしまふやうでは、矢張り妻として一種の不覺である。片輪な生活だと云はねばならない。

子供が出来たが最後、身の廻りなどは、一切構はないで、子供の爲めに一所懸命になる妻も、決して悪いとは云はない。然し、子供の母親であると同時に、良人の妻であるといふことを忘れてしまつてはいけない。

又、子供の前で、良人の悪口をいつたり、良人をやつついたり、子供に良人の缺點を話したりすることも慎んだほうがいと思ふ。良人も妻も、お互ひに子供に對して、親を尊敬し、信頼するやうに指導すべきである。子供といふものは、尊敬の出来る兩親を持つてゐることが、何よりも幸福であるし、又、良き成長をするものである。

又、ストリンダベリーの有名な戯曲『父』に扱はれてゐる問題のやうに、良人と妻が、一人の愛兒を中心にして、その子供の教育について、夫婦が争ふといふやうなことは、つとめて避けなければならぬと思ふ。そこへゆくと日本には、『子は鏡』といふ諺がある位だから、安心していいかも知れないが、あまり鏡にばかり氣を奪はれて、良人に對するつとめを怠るといふことは、どうしても感心出来ないことである。

姑 小姑と圓滿に暮すには

姑、小姑は、現在のところ、常に新婚の妻に取つて、脅威的存在である。いまでもなほ、姑との折合ひが悪く、破鏡の嘆を見る人妻が多いことは、誠に嘆かましい限りである。

かういふことは、恐らく、歐米の國ではないことだと思ふ。良人との不和が原因で、離縁になるのは仕方がないが、良人以外の者との折合ひが悪くて、離縁になるといふことは、人妻としては、泣いても泣き切れないくらゐに、口惜しいことに違ひない。

この姑問題などは、日本に於ける家族制度の、實に永い間の癌であるが、然し將來は、どうかして、その病根を全治しなければならぬと思ふ。それには、姑といふ言葉に、くつ附いてゐる厭な感じを除くことが、何より必要であると考へられるのである。

それには、女全體が自覺して、自分達が姑となつた場合に、息子や娘の結婚生活に對して、出

来るだけ干渉を慎むといふ風にするより外はない。年取つた姑が、若い女性の結婚生活を不幸にする場合があるといふやうなことは、女性全體の責任であり、不名誉なことである。だから女性が、めい／＼自覺して、どんな場合にも、悪い姑にならないといふ決心をしておくことが、必要である。

然しそれは、遠き將來に望み得る改革であつて、現在の姑問題は、かなり多くの人妻をして、重苦しいものとして、當面しなければならぬものにしてゐる。

結婚する前に、姑といふものが絶対に厭だと思へば、姑のない人と結婚する外はないのである。然し、家庭のいろ／＼な事情で、さういふ選擇の許されない女性は、結局姑や小姑のゐる所へ嫁ぐ外はないであらう。ところで、こゝで考へなければならぬことは、いくら姑とか小姑とか云つても、何うにも手のつけられない姑や小姑などいふものは、滅多にあるものではない。

公平に見て、姑と嫁の仲が不和といふやうな場合に、姑だけが絶対に悪いといふやうなことは、百組に一人か二人であつて、双方の事情や意見を聽いて見ると、どちらも少しづつ責任を負はねばならないといふ場合が多いのである。

姑などいふものは、何と云つても、年を取つてゐるので、なかには拗かれてゐる者もあるだらうが、大部分は單純な人が多いのである。だから若妻は、姑の性格とか、心理なんかをうまく呑み込んで、相手の急所を避け、相手の軟かいところへ、そつと優しく接して行けば、案外圓滿に行くのではないだらうか？

それを、『嫁は何事も馬鹿になつて、お姑の意言を訊いてやるのがよい。』と云はれたからといって、あまりさういふことをうるさがる姑に、馬鹿正直にうるさく訊くと、『うちの嫁は、何一つ自分で出来ない、意氣地なしだ。』と云はれるのである。

又、その反對のことを嫁がやり過ぎると、『うちの嫁は何一つ、私になど相談してくれない。』と文句が出るのである。

厄介と云へば、この上ない厄介なことではあるが、かうしたことは、決して、姑と嫁との場合に限らないのである。

だから女性が本當に聰明であり、相手の性格や感情がよく呑み込めてをれば、姑との正面衝突などは、巧みに避けることが出来るのではないだらうか？

ところが、現在の若い女性の中には、人の性格や、人の缺點や長所が見分けられないばかりでなく、自分の性格なり、長所短所などが、自分で分らない人も多いやうである。その爲めに自分の短所を長所と履き違へて、それを姑の前へさらけ出して衝突の原因をつくるといふことなども、かなり多いのではないであらうか。

兵學の本に、「敵を知り、己れを知る者は百戰百勝。」と書いてあるが、家庭生活に於ても、相手をよく呑み込むと同時に、自分自身をよく反省して、自分の缺點や悪い癖を常に出不さないうやうに心掛けることが必要なことである。どこの姑だつて、初めから嫁を窘めるつもりで貰ふものはないのだ。

自分のいけない所と、相手のいけない所とがぶつかれば、姑と嫁とでなくても、大抵の場合に喧嘩になるのは當然である。相手のいけないところは、誰も直ぐ氣がつくのだが、自分のいけない所を自分で本當に氣がついてゐる人は少ない。

姑と自分との不和を、常に姑側に原因があるやうに考へてゐる人妻などは、結局、自分で自分の缺點を反省する力が乏しい人ではないかと思ふ。

勸はり、慰めよ！

年寄は、何と云つても僻むものである。自分は家庭の餘計者だから、邪魔者扱ひにされはしないかと、絶えず僻んでゐるものである。又、いま迄子供が自分に寄せた愛情や尊敬が結婚によつて減りはしないかといふやうなことに、くよくよするものである。だから若妻は、さういふ僻を起させないやうにすることが一番必要な心掛けである。そして姑の趣味とか、姑の心の癖などを、よく呑み込んで誠意を以て仕へたならば、姑との衝突などは、未然に防ぐことが出来るのである。世間には、嫁と仲良くしたいと思ひながら、一寸したこぼれから、仲違ひになつてゐるやうな姑も澤山あるらしい。かういふ姑に、和解の機會を作つてやるのは、嫁の義務かも知れない。それが出来ないやうでは、嫁として無能者と譏られても、仕方がないであらう。

然し、中には、若夫婦の寢室を覗き込んで監視するやうな病的な姑もゐるのだから、姑問題も、

或る人にとつては解決が至難かも知れない。だから私は、一概に若妻のみを責めようなどとは無論思つても見ないところである。が、日本の現在の富の程度や生活の様式では、すべての若夫婦が姑と別居するといふやうなことは、殊に地方にあつては、いよく困難なことなのであるから、どんなに悪い姑があつても、自分の希望を將來に繋ぎ、良人を信頼し、子供の成長を楽しんで、姑問題を克服して行くのが、立派な人妻である。

要するに、敵に對するやうな心を捨て、虚心坦懐に、年寄をよく劬はり、よく慰める、つまり姑に對して、心からの愛情を持つことが、唯一の解決策だと思ふ。

小姑などの場合も同様なことが云へるのである。最初から他人と思はず、自分の肉親の姉妹だと思つて、誠意を盡して應待して行けば、よつほど拗くれた小姑以外は、或る程度まで圓滿に行くのではないかと思ふ。それを、小姑と化粧や衣裳の競争をしたり、女性特有の細かな感情から、小姑に何か敵對意識を以て接するから、感情のもつれが出来てくるのである。

たゞ、良人の兄弟や友人との交渉は、これまた圓滿にやつて行くのはいゝことであるが、相手が男性である場合は、いくら良人の兄弟だからと云つて、狎れ過ぎるといふことはいけない。そ

の爲めに、いろ／＼な誤解を招いたり、面倒な事件が起つたりすることが、多いのである。親しむと共に、出来るだけ禮儀正しく交つておくといふ注意が必要である。

人妻が、自分から三角關係を起すといふやうな場合は、同じ屋根の下に住んでゐる男性との間に、事を醸すのが多いのである。これなどは、よく／＼用心しておくべきであらうと思ふ。

とにかく、人妻は、夫の家族の多い場合は、その家族との、いろ／＼な角度の交際が大變むづかしい。誰にも悪く思はれず、誰にも冷淡にならず、誰とも圓滿に附き合つて行くのには、相當の用意と相當の覺悟が大切である。

かう云つたからとて、何も、恐れることなどはないのである。王陽明がその弟子達から、「長安(人生の理想郷)に行くには、どの道(みち)を歩けばよいか？」と訊ねられたときに、「長安へ行くには、大道がある。平々坦々として、率直に見ればすぐわかるではないか。」と教へた有名な偈があるが、徒らに取越苦勞をしたり、自分で自分の目の前にクリークやトーチカを築いてしまふから道が險路になるのではないだらうか？ 誠心誠意、よく仕へてゆく謙虚な心の用意があつたら、少しも恐ろしくはないのである。

そして、こゝでもまた問題になつてくるのは、その女性の平素の教養や、聰明不聰明の點である。いくら誠心誠意であつても、教養が劣つてゐたり、不聰明であつては、何んにもならぬ場合がある。見當外れの鐵砲を打つたのでは、相手の心的は射てない。娘時代の教養や知識の練磨といふことが、あらゆる場合に、必要となつてくるのを忘れてはならない。

職業婦人の生き方

職業婦人と結婚

現代で、働きたいといふ女性は、頗る多い。二十一、二になつても、結婚のことなど一切考へないで、何か働かると焦つてゐる人が多いやうだ。

又、實際に働いてゐる女性も非常に多い。女店員、女事務員、電話交換手、エレベーターガール、女工員、女給、ダンサーといつたやうに、都會の到る處に職業婦人の姿が見られる。

然し私は、日本の女性の職業は、結婚生活と對立出来るほど十分の收入があるのは、極めて少

ないと思ふ。結婚がいゝか、職業婦人がいゝかと、そんな問題が成立するほど、日本に女性の職業が發達してゐるとは考へられない。それゆゑ、自然とその限度が生じてくると思ふ。

御飯がいゝか、お菓子がいゝかといふ問題は、お腹が空いてゐる時には、もう問題にならない。

それは御飯がいゝかに決つてゐる。職業婦人となるか、結婚するかといふ問題なども、これと同じで、本當に生活しようと思ふ女性にとつては、無論結婚を選ぶべきで、問題にならぬことである。

といふのは、日本には一生涯獨立してやつて行かれるやうな婦人の職業といふものは、殆どないと云つてもよい。極く特殊なもの——例へば、中等學校の先生、女美容師、女髮結、藝事の師匠位であつて、インテリ女性の望んでゐるやうな文筆的な位置などは、東京でも數へるほどしかないのである。

それに、婦人には、職業にも容貌や年齢が問題にされるのが多い。その意味で、二十七、八歳までが生命であつて、大抵の婦人は三十を越せば自然に失業するものが多いのである。それらを考へると、到底普通の女性は、一生涯職業婦人で終るといふことは思ひも及ばぬことである。

結局日本の職業婦人は、結婚するまでの準備時代ではないだらうか？ 比較的貧しい家の子女

が、縁談を見つけたるまで、自分の身の廻りを整へるとか、多少とも婚資を得るとか、その目的から職業に就かうといふのが多いのだと思ふ。

それならば、私は大賛成である。前にも述べた通り、この頃は結婚難がいよゝゝ激しくなつて來てゐる時節である。比較的貧しい家の子女などは、なかゝ良縁を得る機會が少ないのだが、職業婦人として巷に出てゐる中に、いゝ相手を見つけてゐるやうなチャンスがあるのではないか。いや、さういふチャンスを、大いに造るべきだと思ふのである。

結婚相手を探すチャンス

結婚するには、戀愛によつて、相手の人格をはつきり見究めてするのが理想的であるが、日本では、さうした相手を見つけて社交的な場所が全然缺けてゐる。ところが、職業婦人は、比較的若い男性と接觸することによつて、さういふチャンスが恵まれるのではないかと思ふ。私は、職

業婦人が、その位置を活用して結婚の相手を見つけないといふことには、大賛成である。それと同時に、職業婦人は、くだらない男性に誘惑される危険も非常に多い。その意味で職業婦人は、一般の女性より、もつと聡明で、男性に對する認識眼も、鋭利でなければならぬ。男性の認識を誤らなければ、どんな場所に働いてゐても、くだらない男に誘惑される危険がないばかりか、自分の一生を托するに足りるやうな結婚相手を見つけれないのでないだらうか。私の會社のある大阪ビルのエレベーターガールなども、二、三年勤めると、皆それ／＼良縁を得て結婚するやうである。私の顔馴染の連中は、さういふ度毎に、私の所へ挨拶に来るが、私も彼等を成功した職業婦人として、心ばかりの祝儀をやることにしてゐる。思慮がまだ不十分な娘時代に、多くの男性の中に混つて誘惑もされず、身を全うして結婚といふ一生の大道へと進んでゆくことは、どんなに褒めてやつていゝか分らない。祝福してやるべきではないだらうか。

職業婦人と男性の誘惑

しかし、エレベーターガールの場合でも、少し容貌でも美しいと、多くの誘惑があるらしい。エレベーターの中で、お客と二人きりになる場合も少くない。お客の中には、さういふ時に、手を握つたり、肩に觸れたりするやうな不徳なことを平氣でやる男も多いらしい。殊に、同じ會社に勤めてゐる若い社員などからモーションをかけられると、毎日々々顔を合せなければならぬだけに、なかく防ぎ切れない場合だつてあると思ふ。デパートの女店員などでも、毎日々々賣場へ来て、その賣場の品物を買つて、何かと話しかけるやうなお客もあるといふ。かういふ風に、職業婦人は、常に誘惑に曝されてゐるのである。つまり、男性から絶えずモーションをかけられてゐる譯である。従つて、その男性の行爲から、どれが眞實で、どれが誘惑で

あるかを見分けることが大切である。

あらゆる男性の行動を、すべて誘惑の魔手として斥けたならば、結婚する相手を見つけることは、いつまで経つても出来るものではない。だから、多くの男性の、自分に對する行動の中で、眞實の愛情、眞面目な觸手をはつきり見分けるといふことが、女性一生の禍福の岐れ道になるのである。

誘惑と、眞の求愛とは、どこが違ふか。——それは、女性に拂ふべきものを、きちんと拂つて女性の愛情を求めようとするのが眞の求愛の態度である。それに反して、女性に拂ふべきものを拂はずして、女性の愛情を奪はうとするのが誘惑である。だから、誘惑も求愛も、その形式は似てゐるのであつて、違ふのは、その精神である。形式が似てゐるばかりに多くの女性がその判定を誤る場合が多いのは遺憾だと思ふ。云ふまでもなく、この際男性が拂ふべきものとは、女性の歡心を買はんとして提供する金銭や物質を指すのではない。それは誘惑である。眞の求愛の代償は、男性の眞面目なる精神でなければならぬ。精神とは、その婦人と結婚しようといふ誠意だ。とにかく、職業婦人を使ふ側から云へば、多くの場合に、若き女性の持つ性的魅力を利用しよう

うとしてゐることは、争はれない。かういふと、多くの職業婦人は憤慨するかも知れないが、遺憾ながらさうなのだから仕方がない。デパートの女店員なども、つまりは昔の煙草屋の看板娘を近代化したものに過ぎないと思ふ。若い女性の魅力によつて男性の客を惹きつけようといふ氣持が含まれてゐる。

だから職業婦人は、その性質上、或る程度の魅力を發揮することは、已むを得ない責任だといへる。その結果、男性の心を惹きつけて、男性の興味を誘ひ、男性から誘惑されるといふことになるのも亦、已むを得ない因果關係である。看板娘として魅力を示させながら、誘惑にはかゝるなど云ふのだから、かなり無理な注文ではあるが、女性にとつて職業はほんの一次的なものである。その一次的なもの爲めに、一生を誤ることがあつてはならない。さういふ心構へをすることが、職業婦人として、一番大切なことである。

然し私は、女性が誘惑にかゝらないといふことは、それほど難しいことではない。この點は前にも書いた筈だが、結婚しない中は、絶対に自分の肉體を相手に許さないといふ心掛けさへあれば、心配はいらぬのである。

ところが、これほど簡単な心掛けを、多くの若い女性が守れないで、身を過る者の多いのは、寧ろ不思議に堪へない位である。

それから職業婦人は、對お客ばかりでなく、同じ職場に働いてゐる男性からの誘惑もかなり多いことと思ふ。この方が或は、防ぎ切れないのではないかと察しられる。殊に自分の上役である男性からの誘惑などは、最も悪性の誘惑である。しかし、さういふ悪性のものでも、はつきり自分の位置や自分の將來を見通して、『職業は一時的のもの、結婚は一生のものの』といふ考へを持つてをれば、割合簡単に斥けることが出来ると思ふ。それになにも、上役から誘惑されたからと云つて、すぐに職業を犠牲にするといふやうな考へを抱かずとも、そこは少しの技巧を用ゐれば、相手の感情を傷つけずして拒絶することが出来るのではないだらうか。

女性が、『結婚しない中は絶対に體を許さない。』といふ信念から、男性の誘惑に對して、ある程度の方策を用ゐたり、技巧を弄したりすることは、現在の女性に許されてゐる特權だと思ふ。ことに、生活戦線に闘つてゐる女性などは、肝腎の覺悟さへ失はなければ、多少の技巧や策略を用ゐることは、大目に見のがされていゝと思ふ。

とにかく、職業婦人は、外部からの誘惑と、内部からの誘惑と、内外共に狼群の敵を受けてゐるのであつて、自分の貞操を守る爲めには、相當の大覺悟を有つてゐなければならぬ。しかも、さうしたあらゆる誘惑の中に立つて、自分の一身を托すべき男性を見出すといふことは、なかなか難かしいことであるが、然しこれも、聰明な頭と、十分な覺悟があれば、さして困難事ではないと思ふ。それには、どうしても、男性の性格を見抜き、その男の人間の價値、生活力のある無し、といふ點を、はつきり見分ける眼を養ふことが、緊要なことである。然し、職業婦人は、常にいろ／＼な男性と接觸してゐるのであるから、學校出や、上流家庭の女性などよりは、案外容易く得られるのではないかと思ふ。少くとも、職業婦人は、さういふ立場に置かれてゐる自分達を信じて、誘惑といふ人性の陥穽には入らぬやう、十分心を用ゐてもらひたいものである。

現代良人讀本

女性尊重の習慣

亭主關白と細君女王

日本の男性が、西洋の男性に比べて、一番違つてゐる點は、女性尊重の念が、乏しいことである。これは、日本の女性にとつて、一番の嘆きであらう。

日本の女性が、妻として、西洋の女性に比べて、不幸な點があるとしたら、一番にこの點であると思ふ。

西洋では、中世紀の騎士時代に、騎士道の第一の資格は、ギヤラントリイといふことであつ

た。それは、女性を敬愛するといふことであつた。女性に亂暴な人間などは、騎士の資格がなかつたのである。かういふ習慣が、今もなほ西洋人の間に残つてゐて、何事をするにも女性第一である。

むろん、西洋でも夫婦間の不和もあり、喧嘩もあり、離縁もあるが、しかしいくら仲が悪く喧嘩をしても、いやしくも紳士たるものは、女性に對して、暴力を振つたり、小突き廻したりしないのである。あくまでも、紳士的に不和になり、紳士的に喧嘩をしたりするので。亂暴な罵倒をしたり、嗚鳴つたりしないのである。これ丈でも、西洋の人妻は仕合せだと思ふ。

また、西洋の夫婦は、愛情が無くなつてゐても、お互ひに年を取つてゐても、良人は妻に對して、常に親切である。日本の老夫婦は、常に老妻が、老夫の世話をしてゐるが、西洋では老いた妻を、何事をするにも、劬つてゐることは、誰でも知つてゐる通りである。

一生涯、妻を劬り、妻の御機嫌を取らねばならぬ西洋の良人は、氣の毒だと思ふが、それ丈西洋の人妻が、幸福であることは、確かである。日本は、それと逆で、妻は一生良人に酷使された上、いつまでも奴隷のやうに、良人に仕へてゐるのが多いのである。

日本の家庭では、亭主は常に關白である。西洋の家庭では、妻は常に女王である。

汽車の中で、西洋人の老夫婦などを見かける場合、大抵老妻の方が、威張つてゐる。豚のやうに太つた老妻が、威張つてゐると、老いた良人は何くれと話しかけたりなんかしてゐる。昔、妻の若かつた頃、その前に跪いて求愛したが最後、死ぬまで相手の御機嫌を取らねばならぬのかと思ふと、良人の方に少し氣の毒になるが、しかし一生涯良人に對して、威張つてをれる西洋の人妻は幸福である。

アメリカなどでは、離縁が頗る多いが、これはアメリカ人の夫婦仲が、日本人などに比べて、險惡なためでなく、女性が威張つてゐるからだと思ふ。

男女が飽き易く薄情であるのではなく、女性が強いからだと思ふ。良人の愛情が冷めたり、良人に外に愛人が出来たりすると、忽ち離縁を要求したり、別居を要求したりする権利が、許されてゐる爲であると思ふ。

良人に、第二の女性が出来た場合、アメリカの女性は、十中八九、敢然として去るのである。が、日本では大抵の人妻は、泣き寝入りである、忍びがたきを忍び、堪へがたきを堪へて泣き寝

入りをするのである。

さういふ點から考へても、日本の女性は、まだ充分にその権利や位置を認められてゐないのである。

勿論、日本の女性が貞淑であることは美德に違ひないし、あらゆる問題で良人と抗争したりすることなどは、いゝことではないが、しかし貞淑と云ふ美名の下に、あまり多くの不幸や苦しみを忍ばねばならぬとすれば、つまらない話だと思ふ。

西洋の婦人ほど尊重されなくてもいゝが、もう少し一般的に女性といふものが、男性から尊重されていゝと思ふのである。

それには、もつと男性一般に、女性尊重の習慣が養はるべきではないかと思ふのである。

さうなれば、あらゆる女性が、今よりは幸福になると思ふのである。あらゆる人妻が、今よりは一段か二段かは幸福になると思ふのである。

女性尊重は家庭から

日本では、昔から女性が輕蔑されてゐたのである。『太閤記十段目』の臺詞ではないが、(女子供の知る事でない)といつたやうな考へ方が普遍してゐるのである。(女は罪障が深い)とか、(女に學問は不用)とか、(女に學問は不用)とか、昔から特殊扱ひされてゐたのである。幕府時代などは、武士などは間違つて妻を殺しても、罪にはならなかつた。とにかく、永い間の女性蔑視が、明治維新になつても抜け切らないのである。

現在でも、女性を動物扱ひにする公娼制度などが残つてゐるのである。

夫婦關係でも、昔は良人は、家風に合はぬとか、子供が無いからとか、勝手なことを云つて、いつでも妻を離縁することが出来た。ところが、妻の方からは、どんな不快な良人でも、どんな残酷無情な良人でも、別れることが出来なかつた。良人が死ぬまでは、どんなに不快でも、強い

鎖で良人にくくりつけられてゐたのである。

何うしても離縁したい人妻は、鎌倉にあつた縁切寺へ逃げ込んで、尼になるより外に方法がなかつた。

しかも、その縁切寺なども、鎌倉以外には、さう澤山なかつたらしいから、交通不便の關西や東北の人妻などは、良人と離別する手段は、絶對になかつたのである。

その上、大名などの家庭では、どんな若い未亡人でも、再婚は許されなかつた。そればかりでなく、婚約中に相手が死ぬと、そのまゝ後家を通さねばならぬ場合すらあつた。

それほど、女性は認められてゐなかつた。かうした女性蔑視の考へ方が、いまでも日本の男性の頭の中に、ひそんでゐるのである。

そのために、日本の女性がどれ丈辱められ、どれ丈不幸にされるか分らないと思ふ。

さうした男性の考へ方を、打破するのは、一朝一夕のことではない。しかし、不可能なことではない。日本の女性が一致して、努力すれば、十年か二十年かの中には、日本の男性の考へ方が違つて來ると思ふ。

その方法は、何處にあるかといふと、一般の家庭教育にあると思ふのである。凡ての男性は、女性に依つて養育されるのであるから、凡ての母が、自分達の男の子を養育する時に、女性を尊重する習慣を植ゑつけることである。

ところが現在の母親には、それ丈の自覺がないらしい。自分が、良人から散々不幸な目に會はされてゐながら、自分の男の子を、妻を愛する親切な男に育て、やらうと云ふ氣持が動かないらしいのである。

日本の現在の人妻が不幸であると思へば、人妻達は自分の男の子達を、將來もつと親切な良人になるやうに、教育するのが當然であると思ふのである。それが、現在不幸に沈んでゐる女性が、將來不幸に沈む多くの女性を救つてやれる有力な方法であると思ふ。

自分が、良人からいぢめられたり、薄情にされて、口惜しいのであつたら、自分の男の子達に、女性を尊重する性質を養ふべきであると、思ふのである。それが、將來の日本の女性の家庭生活を、幸福にする唯一の方法かも知れないのだ。

現在では、母親のさうした自覺が足りないため、大抵な家庭に於て、男兒尊重主義である。

男の子は、子供の時から、女の子に對して、あらゆる優先権を與へられてゐる。男の子の無理が通り、女の子の道理は、大抵の場合、引つ込まれるのである。勿論、男の子を尊重するものゝが、それと同時に女の子に對して、暴力を出したり、壓制したりすることを嚴重に戒むべきであると思ふ。女の子の弱さを輕蔑したり、それを利用したりすることを、嚴重に戒むべきであると思ふ。子供の時から、女の子に絶對に、手をかけてはいかぬ、女の子をいぢめてはいかぬ、女の子は、常に劬り、常に親切にしなければならぬと教へられるべきである。かうして女の子を劬り、女の子に親切であることを教へられた男の子は、長じて親切な善き良人となるのである。

これに反して、子供の時から、女の子の弱さを利用したり、女の子をいぢめたりする男の子は、(三つ兒の魂百まで)といふ譬の通り、年長じて、邪慳な、暴虐な良人になり易いのである。もし、良人の暴虐に泣いたり、放埒に惱んだりしてゐる人妻は、良人はともかく、自分の男の子は將來、悪い良人にならないやう、注意して教育すべきではないかと思ふのだ。現在、悪い良人に惱まされてゐる人妻が、銘々心を合せて、自分の男の子達を、善い良人に仕

立て上げるやうに教育したならば、將來日本の人妻は、ズーツと幸福になれると思ふのである。つまり、日本の一般の男性が、もつと女性を尊重し、親切になるやうに、教へることだ。しかも、さういふ機會は、女性が握つてゐるのであるから、あらゆる女性が自分自身のことばかりを考へず、將來の女性を救ふつもりで、努力すべきではないかと思ふのだ。日本の男性は、女性に對して、我儘であり、勝手である。しかし、それを矯正する力は、女性を持つてゐるのだ。

これは、家庭教育の問題文ではない。小學校教育でも、もつと注意されてもよいと思ふ。小學校教育でも、現在では男の子が、女の子に對して、持つべき道德については、殆んど教へられてゐないのである。

(女の子には親切にせよ)といふやうなことは、殆んど書かれてゐないやうである。(姉妹に對する心得)なども説かれてゐない。まして、結婚した後、(妻に對する心得)などは少しも教へられてゐない。そのくせ、女生徒に對しては、良妻主義が、盛んに説かれてゐるのだ。小學校は、義務教育であるから、せめて六年生になれば、男の子に、(善き良人たれ)といふやうな教訓が、何

かの形式で説かれてもいと思ふのである。

女性に對しては、あらゆる教育機關が、(善き妻たれ)と、くり返しくり返し教へてゐるに拘らず、男子については小學校から中學校、高等學校から大學と、未だ曾て(善き良人たれ)と、教へられることはないのである。

これでは、片手落も甚しいのである。(女に心許すな)といつたやうな思想が、今も残つてゐて、女性とか妻については、何も語らない方が、男らしいといふ風に、考へられてゐるらしいのだ。そして、妻になどあまり甘くない方が、立派な男子とされてゐるらしい。

これでは、日本の男性が、女性を輕蔑したり、女性に對して、我儘を働くのは當然であると思ふ。

家庭教育に於ても、學校教育に於ても、もう少し女性を尊重する思想が織り込まれない以上、日本の女性は幸福になれないと思ふ。

良人の第一條件

私は、善き良人たる第一の資格は、女性を尊重することだと思ふ。

戀人を尊重したり、母や姉妹を尊重したりする人は多いが、女性といふものを一般的に尊重することが、大切だと思ふのだ。

惚れてゐる女性の前では、ペコ／＼する男がゐる。しかし、それは女性を尊重するといふことにはならないのだ。かういふ男は、好きな間丈は、ペコ／＼するが、飽きて來ると、忽ち冷淡になつたり薄情になつたりするのである。

もつと、廣い意味で、深い意味で、女性を尊重する男性でなければならぬ。

どんな男性でも、自分の好きな女性には、誰でも親切だ。しかし、さういふ親切は、當にないのである。一旦好きでなくなると、掌を返す如く、薄情になり易いのだ。

だから、戀愛をしてゐる場合など、相手がどんなに親切でも、この人は親切な人だと、早合點してはならないのだ。自分に對する行爲では、判斷せず、その男が一般の女性に對して、どんな態度を取るかを、觀察すべきであると思ふ。

殊に、女中などの奉公人に對して、思ひやりがあるかどうかなどは、些細な點ではあるが、その人の人格を現してゐる場合が多いのである。目下の使用人に對して、一人の人間として扱つてゐるかどうかなどは、注意すべき點だと思ふ。人間の性質は、不用意な點に現れるのである。戀人に對しては、あらゆる注意を拂つてゐるが、他の女性に對しては、その人の飾らない本性が現れ易いのである。

女性に對して、親切な男性といふ意味は、少しの野心も持つてゐない女性に對しても、親切な男性といふことである。少しでも、下心がある以上、その親切は本當の親切ではないのだ。器量のよい若い娘などへの親切は、本當の親切ではないのだ。

惚れてゐる時丈は親切な男、好きな間丈の親切な男などは、良人としては案外、頼みにはならないのだ。夫婦生活は、雨風が多く、最初の情熱は長く續かないのである。最初の戀愛が醒めた

後でも、妻に對して親切であり得る男は、本質的に女性に對して親切でなければならぬと思ふ。

本質的に、女性を尊重する男は、たとひ妻との情熱がさめても、妻を一個の女性として尊重することは、忘れないであらう。(惚れて通へば、千里も一里)では、駄目なのである。惚れてゐなくつても、女性のためには欣んで、百里の道を一里位と思ふ男が、頼もしい男なのだ。

女性を尊重し、女性を劬ることを知る男は、結婚生活に於て、どんな風波が起らうとも、妻を劬つてくれるだらうと思ふのだ。

愛情だけでは足りない

夫婦の間は、愛情だけの問題ではない。愛情は、冷める時もあり、減退する時もあるのだ。さういふ場合は、結局人間對人間の問題になるのだ。男性對女性の問題になるのだ。愛情が無くなつた場合にも、妻を一個の女性として劬つてくれる良人でなければ、頼もしくないのだ。

また、愛情がある場合も、猫や犬を可愛がるやうな可愛がり方をされたのでは、女性には不満であらう。女性を一個の完全な人格として認めてくれなければならぬ。女性の権利、女性の感情を尊重してくれるのでなければ、頼もしくない。

賣笑婦を愛するやうな、人格を認めない愛し方は、女性に對する正しい愛し方ではないのだ。(志を養ふ)といふ言葉があるが、志を養うてくれるのでなければ、駄目だ。つまり、女性の思想なり感情なりを劬つてくれることだ。

かういふ良人は、現在の日本では、あまり澤山ゐない。それは、古來日本では、女性の人格が、あまりにも無視されてゐたからである。現在でも、女性の自由を拘束して、その貞操を賣り物にする公娼などが存置されてゐるのだ。かういふものがあるのは、一般の女性に對しても、大きな侮辱ではないかと思つてゐる。

とにかく、女性を尊重するといふことは、良人たる第一の資格である。夫婦別在り、といふことも、つまりは夫婦間にも、愛情以外の敬意がなければならぬことを、示してゐると思ふ。

しかし、現代では、細君を大事にすると、サイノロジイなどと云つて冷笑されるし、中には人

前では、良人の威嚴を示すために、わざと妻に對して、亂暴な振舞ひをする人などがをる。困つたことである。

西洋人の夫婦が、どんなに年を取つても、良人が常に細君を劬つてゐるほどでなくつても、日本の良人は、もつと各自の妻を大切にすべきであると思ふ。それは、つまり日本の男性に、女性尊重の思想が足りないからである。

私は、善き良人たる第一の資格は、女性を尊重する——つまり女性を一個の人格として尊重することだと思ふ。

妻を幸福にする道

良人の第一の覺悟

良人たるもの、結婚についての覺悟は、一生涯絶對に、妻を離縁すまじといふ、決心でなければならぬ。

さういふ決心がないのに、結婚することは、罪惡である。先づ、さういふ決心が、出来るやうな、立派な女性を妻に選ぶべきである。この女なら、一生苦勞してもよいといふ、納得がついてから、結婚することである。

とにかく、両親が早く結婚せよと云ふから、両親を安心させるために、結婚しようとか、この女と結婚すると、商賣をする資本を出してくれるからとか、この女は職業婦人だから、萬一の場合に役に立つ、といったやうな動機で、結婚してはならないのだ。

尤も、どんな動機で結婚してもいゝが、先づ結婚する前に、この女を一生捨てないぞと云ふ覺悟を、定めて貰ひたいのだ。その覺悟が、つかない以上、結婚しない方がいゝのだ。その覺悟なしに、結婚するのは、女性をだますことである。

夫婦とは、人生行路の山坂を越える、旅路の同行二人だ。一組なのだ。この旅路は、男女二人の一組で、出發すべきものだ。人生で最も嚴肅な組合せなのだ。さうした組合せの相手として選ぶ以上、人生の旅路の果までも、同行すべきものなのだ。殊に、女性は足弱なのだ。人生行路の中途まで行つて、お前と一緒に行くのは飽きたと云つて捨てられた女性は、何うなるか。強者である男性を頼りとして歩いてゐる女性が、相手からポイと放り出されたら、何うなるか。

足弱の同行者を、捨てるといふことは、殘酷なことでもあるし、人生に於ける最も大なる契約違反である。殊に、三十以上になつた女性は、もう再び新しい同行者を探さうと思つても、大抵

の場合、その機会はないのである。

人生の旅路を、一緒に旅行しようといふ約束をしながら、中途で放り出してしまふ。こんな残酷なことが、世の中にあらうか。しかも、自分は足腰の強い男性で、相手はかよわい足弱なのである。妻を離縁する男性は、良人の中で最悪の良人である。

尤も、妻が不貞を働いた場合は、仕方がない。これは、妻の方が先に、契約違反をしてゐるのだ。妻が不貞を働かない以上、男性として妻を離縁するのは、残酷でもあれば卑怯でもあると思ふ。

アメリカあたりの離縁は、大抵は女性の方が、云ひ出すのである。女性が権利が強くて、良人が少しでも氣に入らないと、離縁を申し出すのである。が、日本では、その逆に良人の方から、離縁を云ひ出す場合が多いのである。

夫婦の場合、良人が妻に惱まされる場合などは、先づ少いのである。良人は、肉體的にも生活的にも強いのであるから、良人が妻のために、いぢめられる場合などは、考へられないのである。極端に病的な妻の場合は別として、良人が妻との同棲に堪へぬなどといふことは、まづ絶無

だと云つてもよいのである。

もし良人が、妻との同棲を嫌がり出したとすれば、我儘か浮氣かの、どちらか一つである。だから、良人が、妻を離縁する正當の理由は、妻の不貞以外、殆ど考へられないと云つてもよいと思ふ。それに比べると、女性は弱いのである。我儘の良人のために、或は放蕩無慚な良人のために、死ぬやうな苦しみを受けてゐる場合も多いのだ。

夫婦生活に於ては、肉體的にも精神的にも、男性は強者、女性は弱者である。この両者が同棲して、うまく行かないとすれば、女性の方がより苦しいのは、定つてゐるのだ。男性は、家庭以外に、娯樂や快樂を求める場所が、いくらでもあるが、女性には、殆どないと云つてもよい。男性は、家が不愉快になれば、家庭にゐる時間を、いくらでも短くすることが出来る。ところが、女性は、家庭がどんなに嫌でも、四六時家庭に縛られてゐる外はないのである。

だから、良人は、どんな悪妻でも、辛抱が出来ないといふ場合は、ないと考へられるのだ。何らにも、からにも辛抱が出来ない悪妻などは、千人に一人、萬人に一人だと思ふ。辛抱しきれない良人は、十人に一人、百人の中には十二三人もをるのではないかと思ふ。

だから、夫婦生活に於ける被害者は、大抵の場合、女性である。それで、女性がその堪へ切れない被害から免れようとして、離縁を考へ、離縁を計ることは、合理的である。

ところが、男性が、妻から堪へ切れない被害を受ける場合などは、極めて稀である。妻が、不貞を働く場合以外は、想像出来ないのだ。妻が、浪費家であつたり、虚榮家であつたりする場合だつて、良人はこれを矯正する力を持つてゐるのだ。妻の悪徳を矯正し、監督する力があるのだ。氣に入らない妻を、離縁する前に、先づこれを矯正する力があるのだ。それをやらないのは誠意がないのだ。

これに反して、妻は、良人の非行を矯正したり、糾弾する力がないのだ。何うにも堪へ切れない場合は、離縁して去ることが、残されてゐる唯一つの道なのである。

それなのに、大抵の離婚は、良人の我儘から起つてゐるのだ。良人の放蕩から起つてゐる場合が多いのである。良人が他の女性と關係して、妻を離別する場合だつて、可なり多いのである。

その上、離婚そのものから受ける被害だつて、良人より妻の方が、何倍もひどいのである。

男性は、妻を離別したつて、再婚し得る場合が多いのだ。殊に、もう跡代りの女性が出来てゐるのだ。

場合などは、再婚の回数もかゝらないのだ。しかし妻は一度離別された以上、再婚の機會は極めて少ないのである。尤も、二十三迄位は、それでも機會があるが、二十七八から三十を越すと、容易にないのだ。兄弟や親類の家で、しがない埋木の一生を送るやうな悲惨な場合だつてゐるのだ。

さういふ意味で、離婚といふことは、良人が妻になす悪行の中で、最大の罪悪である。

たとひ、浮氣者で、女關係を絶えず作つてゐるダラシのない良人でも、決して妻を離縁しないといふ覺悟を持つてゐる良人は、悪い良人であるにしても、最悪の良人ではない。最悪の良人は、妻を離別する良人である。

妻を離別する良人は、元も子もなくしてしまふ良人である。妻にとつては、一番いけない良人だ。夫婦でゐる間は、どんな不仲でも、またどんな機會で、夫婦らしくなるかも知れない。離縁してしまつたら、それぎりだ。

だから、妻は絶対に離縁しない覺悟を持つてゐる、良人であることは、良人として最初の資格なのだ。

戀愛結婚でなくとも、どんなあわたしい結婚をする人でも、妻を離縁しない覺悟を持つてゐれば、結婚する第一の條件は、持つてゐると云つてもよい。

一度ぎりの見合や、寫眞丈の見合で結婚しても、(寫眞結婚だからどんな女かも知れない、しかし一度結婚した以上、離縁はすまい)と思つてゐたら、その人は良人たる第一の資格があると云へる。それは、結婚に對して、責任を持つことだ。(絶対に離縁しない)といふことは、最低の保證だ。(俺は妻を一生離縁しない)といふ上に、(俺は、妻をきつと幸福にしてやる)といふ決心があれば、更に申分がない。が、たゞ(離縁しない)といふ最低の保證を持つてゐる場合だつて、外に女が出來ると、從來の妻を邪魔物とばかり離別し去る良人に比べて、勝ること萬々である。

妻を捨てるは最悪の良人

前に云つた通り、夫婦は人生の同行二人である。人生の幾山坂を一緒に越えようと約束した二

人である。それなのに、中途の峻しい坂道にかゝつた時、(俺は外の女と一緒に旅行するから、お前は、一人で勝手にせよ)と、放り出す男性は、よつぽど冷酷な人間だと思ふ。妻を愛さないばかりか、人間といふものを愛し得ない人だ。

織田信長のやうな、平氣で残酷なことをする人間を、忍人と云ふのだ。他に女性が出來たからと云つて、長い間一緒にゐた妻を離別する良人なども、この忍人なのである。

私は、他にどんな悪い噂がある人でも、糟糠の妻を大事にする人は、何となく親しみを覺える。詐欺取財や盗坊をするやうな男でも、妻子を大事にしてゐる男などは、悪人ながらも感じがよい。立派な仕事をし、立派な位置にゐる人間でも、二三人も妻を換へた男などは、どうしても感じがよくない。

それは、人生に於ける最も重大な約束を破棄してゐるからだ。結婚と云ふことは、人生に於ける最も重大な約束である。その約束を、重大な原因なしに、破棄するやうな人間は、人格的にどこか缺點があるのである。

とにかく、一度結婚した以上、良人たる者は、その妻の一生に對して、責任を負はなければな

らないものである。不幸、夫婦の間が不和で、別れた場合でも同じである。アメリカなどは、離婚の場合、妻が扶助料を請求することは、當然の権利とされてゐる。

日本では、大抵の場合、男性が高壓的に離婚し、女性の方は泣き寝入りになるのである。妻の方から、法律に訴へる場合なども、極めて稀であるし、法律に訴へて見たところで、充分な慰料などは、なか／＼貰へないのである。

これも、前に云つた如く、女性が充分に尊重されてゐないためである。私は、男性が結婚する場合には、絶対に妻を離別しないと決意すると同時に、萬一離別した場合には、相手の生活を保証する責任があると考へてゐるのである。しかし、さういふ風に、道徳や法律を變へて行くことは、急には難しいから、現在のところ、心ある男性の自覺を促す外はないのである。

愛情のバロメーター

女子と小人は與し易し、といふ言葉がある。それは、女子は心のうごき易いものであるから、どんなにでも操縦が出来るといふ意味だ。

つまり、男子の方から云へば、女性を悲しませることも欣ばせることも、簡単だと云ふことである。まして、全心を良人に捧げてゐる妻は、良人の一舉手一投足に、喜怒哀樂が懸つてゐるのである。だから、良人たるものは、妻を欣ばしたり、幸福にしたりすることは、一寸した心づかひで、何うにでもなるのだ。

が、世の中の良人の中には、さうしたわづかな心づかひすら惜んで、妻を欣ばしてやらないばかりか、妻を悲しませてゐる者が、可なり多いやうである。

亡き小説家の田山花袋氏が、(男が女を愛してゐるかどうかは、結局その女に使ふ金の額に比例するものだ)と、云つたことがある。愛情の多少を金で評價しようといふのである。

男の女性に對する愛情は、金を通じて現れるといふことになると、貧しい男性は、女性への愛情を現す方法がなくなるわけだから、この考へ方は、賛成することは出来ないが、一面の眞理はたしかに含んでゐる。

金を持つてゐる良人の場合には、彼がその金を妻のために、どの位使ふか、妻に對する愛情のバロメーターになる場合も、あるのである。殊に、女性は物質の贈與を欣ぶものだ。調度、身の廻りのもの、衣類、装身具、女性を欣ばす贈り物は、いくらでもあるのだ。男性が、戀人を欣ばすつもりで、妻に向つたら、どんな妻でも、にこ／＼欣ぶに違ひないと思ふ。

妻に贈物をする場合は、妻にねだられる前に、自發的にした方がいい。妻にねだられて、十圓のものを買つてやるよりも、ねだられない前に、妻の心持や要求を察して、五圓のものを買つてやつた方が、どれ丈妻を欣ばすか分らないと思ふ。

その贈物も、結婚記念日とか、妻の誕生日とか、自分の月給があつたからといふ風に、心を使つて買ひ與へることにしたら、妻は二重にも三重にも欣ぶものだと思ふ。

女性のために使ふ金銭の額が、男の愛情のバロメーターだと云つたが、それと同時に、その使ひ方に良人の妻に對する愛撫が、含まれてゐれば、その効果は二倍にも三倍にもなるのである。又、女性は、自分に生活力がないため、自然に金銭を頼りにするものであるから、夫婦の間の貯金などは、出来る丈、妻の名義にすべきだと思ふ。夫妻どちらの名義にしても差支へのない財

産なども、出来る丈妻の名義にして置く方がいいと思ふ。妻の名義にして置いても、良人はいつでも自由に行使することが出来るのだから、名義だけはせひ妻のものにして置く方が、どれ丈妻を安心させ、幸福にするかも分らないと思ふ。

愛情には姿態も大切

とかく、日本の夫婦、殊に良人は、妻を愛する姿態をやらなさすぎるのである。これは、日本武士道の弊である。西洋の騎士道は、前にも書いた通り、女性尊重といふことが重大な特色になつてゐるが、日本の武士道は、(女子供の知る事でない)であり、(女に心許すな)であり、女性に甘いことを武士の恥のやうに心得てゐた。その名残りで、人前などで、わざと細君に邪慳に振舞つて見せる良人などもあり、心の中の愛情を動作に見せることを恥とするくせが、付いてしまつてゐるのである。

西洋の夫婦が、お互ひ同志を、(いとしきもの)と、呼ぶのに比して、日本では妻のことを、(お
い!)とか(こら!)である。かういふことから出来る丈妻には、忍苦的な生活を強ひ、衣類な
ども絶對に買ひ與へないといふやうな風習が、残つてゐるやうである。

日本の良人が、西洋の良人に比して一般的に妻を愛してゐないとは云へないが、しかし、その
愛情を姿態で示すといふことになる、西洋の良人に比して、遙かに劣つてゐるのである。と
ころが、女性といふものは、内容よりも形式が大事なもので、心の中で愛されてゐると共に、言
葉でも動作でも、それを形の上で現して貰ひたいものなのである。

そんな意味で、日本の良人は、もつと形の上でも、妻を愛する習慣を養成すべきではないか
と、思ふのだ。

日本の人妻の中では、殊に子供の多い中流以下の家庭の人妻などは、年中何等の娛樂も、休養
も取らないで、たゞ家事と育児に没頭してゐる人も、可なり多いやうだ。良人たるものは、彼等
の酒代の一部を節約して、かうした人妻に、せめて月に一度は映畫を見せ、月に一度は外で食事
をさせるといつたやうな、心づかひをしてもいゝのではないか。

妻に對して、戀人に示すやうな心づかひの十分の一をも、惜んでゐる良人が、澤山ゐるのでは
ないだらうか。

妻があまりに、心安いために、心安立に何にもしてやらない良人が、おはしないか。

(金が男性の愛情を示す)と云つたが、金の乏しい良人も、妻に對する眞の愛情があれば、わ
づかな金に依つて、妻を欣ばすことが出来るのではないだらうか。わづかの金も、深い心づかひ
に依つて、妻を充分幸福にしてやれるのではないだらうか。

結婚生活に馴れ、育児や家事が忙しいために、どの家庭でも、妻の娛樂や幸福といふことは、
あまりにも顧みられないでゐるのではないだらうか。良人は、あまりに妻に馴れてゐるために、
あまりに妻が従順であるために、妻の立場に立つて、妻の事を考へてやることを忘れてゐはしな
いか。良人のわづかな心づかひで、妻が忽ち幸福になれるのではないだらうか。

妻の幸福は、良人に鍵を握られてゐるやうなものである。良人は、自分の仕事が忙しいために
その鍵を事務机の抽出しに、しまひ忘れてゐないか。自分自身の快樂や娛樂のための出費の一部
分を、妻のために出してやるといふことを考へることさへ、忘れてゐる良人がありはしないか。

人間は、人を幸福にしてやることで、自分が非常に幸福になれるものである。殊に、一生同棲しなければならぬ妻を、幸福にすることで、良人自身の方が、どれ丈幸福になれるか分らないと思ふ。

良人の貞操

収入は妻に

何處の家庭でも、家計は、大抵は妻がやつてゐる。しかし、良人の中には、その収入の一部をしか、妻に渡さない人がある。

月々収入の定つたサライマンは、その収入を妻に隠すことは、殆ど不可能であるが、収入が多く、また収入の不定な職業に在る人達は、その収入の一部もしくは大部分を、妻に渡さないで自分の懐中に藏すことが可能である。凡そ、かういふ良人に、浮氣者が多いのである。

良人の収入を制することは、即ち良人の浮気を制することである。

これは、前にも一度書いたと思ふが、現代に於ては賣笑婦に接する時は勿論であるが、さうでない女性と戀愛をするにも、情事をするにも、必要な金は金である。

愛人と交際するにも、資本がなければならぬのだ。殊に都會では、金のかゝらない草原で戀をさゝやくことなどは不可能である。

愛人に對しても、お茶を喫ませなければいけないし、食事をさせなければいけないし、場合によつて相當なプレゼントもしなければいけない。

賣笑婦の愛は、金で買ふのであるが、素人の女性の愛も亦、それを獲得し、それを享しむ爲には、相當な費用がかかるのである。

だから、良人たるものが、生涯妻に對して、貞潔でありたいと思ふならば、妻の目を通さない金は、一文も身につけないことである。

かういふ決心は、結婚後早ければ早いほど、よいのである。新婚早々、良人はさうした決心を、妻に吐露すべきである。二年経ち、三年経つてから、やらうとしても、なか／＼やれるもの

ではないのだ。

官吏などが比較的、品行が正しいのは、月給やボーナスの類が一定してゐて、妻がその収入を監視することが出来るからだ。これに反して、實業家や商人などは、常に事業や商賣の運轉資金を持つてゐるので、妻はどこまでが良人の小遣で、何處からが、商賣の資金であるか、到底見分けがつかなくなつてしまふのである。

しかし、理想を云へば、さういふ場合も、良人は事業上に於ける收支を、妻に報告して、事業の状態を妻に知らせ置くことは、望ましいことだと思ふ。

自家の仕事の收支計算をも、妻に知らせて置くことは、妻に良人の仕事に關心を持たせることになるし、同時に良人が自分の品行についての潔白さを妻に證明することにもなるのだ。

大抵の男性は、浮氣者である。好色癖がないなどいふ男は、百人に二三人である。どんな良人でも結婚當時は、妻を永久に愛して、妻以外の仇し女に、心を移したり、體を接したりすまいと、決心するのである。

しかし、二年経ち三年経ち五年経ち、七年と経つうちに、いろ／＼な機會で、多くの異性と接

觸してゐるうちに、最初の決心を忘れて、妻以外の女性に、愛を感じるやうになるのである。

自分の心といつても、自分からどうにもならない場合がある。だから、自分の心を頼まず、たとひ心が動いても、何うにもならないやうな、仕組にして置くことが必要なのである。その一つの仕組は、自分の収入の全部は、妻に明示して置くことである。友達に誘はれて行つたカフェに美しい娘がゐて、自分に對して、何かしら好意のある動作をする。そんな場合、小遣が豊富なら、どん／＼通ふことが出来るのである。しかし、カフェ遊びも、生やさしい金ではやれない。殊に、女給などに野心を持つて、その歡心を買はうと試みる時は、一寸華美な金の使ひ方をしなければならぬ。

殊に、この頃の女給は、客の懐工合などを察する觀察眼を、備へてゐるから、口先などでは容易にだませるものではない。

先に立つものは、金といふことになつてしまふのである。

素人の女性と戀愛をする場合だつて、やはり金が必要である。

だから、良人たるものが、妻に内證で使へる金銭を、一文も身につけてゐないといふことは、

妻に對して貞潔を守り得るための唯一の保證と云つてもよい位である。

だから、妻に自分の収入を監視させるといふことは、妻に間接に自分の品行を監視させてゐるやうなものである。

むろん、新婚早々の時は、誰も妻を裏切らうなどとは、思つてゐない。何時迄も、妻一人を愛しようとして決心してゐるに違ひない。然し、人間の心は自分のものながら、頼みがたいものであるし、永い一生の間には、どんな機會があるかも知れないし、どんな美しい痴蝶が、自分の肩に止まつたりするかも知れないのである。そんな時の豫防として、妻に隠しては何事も出来ないやうに、自分で自分を制して置くことは、良人たるものの妻に對する真心の一つではないかと思ふ。

狙はれた良人の貞操

妻以外の女性に心移すことは、妻に對する最大の罪惡である。

大邸宅に住んで、數多の召使にかしづかれ、指には何かラットといふダイヤを飾り、數千圓もするオーヴァーを着、出づるに高級車あり、三越、高島屋に行けば、店員達が幾人も集まつて御機嫌を伺ふといつた令夫人でも、その良人が浮氣者であれば、彼女は最も不幸な女性の一人である。

家賃十圓位の陋屋に住み、主人は日給一圓五十錢である。二人の子供があり、貧苦洗ふが如くである。しかし、主人は眞面目で、工場が了れば、時計の針の如く、家を指して歸つて来る。上の子供を連れて、錢湯に行つてゐる間に、妻は夕餉の支度にかゝる。五錢で買つて来た乾物を焼いてゐても、彼女は妻として幸福であらう。

良人の貞操は、妻にとつて萬金のダイヤよりも尊いのである。

しかし、現代に於ては、富んでゐて、品行の正しい良人といふのは、甚だ稀である。富んでゐると、妻以外の女性に、接觸する機會も、又妻以外の女性から誘惑される機會も、多いのである。貧しき良人は、妻以外の女性と接觸する機會も少く、妻以外の女性から誘惑される機會も少ないのだ。

しかし、貧富を通じて、良人が妻に與へ得る最高最大の贈り物は、良人の貞操だ。しかし、それはガラスの家のやうに壊れ易いものだ。多くの良人が、その貞操を破り易い機會は、やはり賣笑婦の場合だ。

これは、賣笑の機關が、あまりに完備してゐるからだ。日本のあらゆる都市には、遊廓とか待合とか、いかゞはしい料亭が公許され、そこで白晝公然、賣笑が行はれてゐるのである。そして多くの人妻の不幸が、かうした家の中から醸し出されるのだ。その上、大都會には、バーやカフェがあり、そこにもまた妻を持つてゐる男性を誘惑せんとする、多くの人魚の群がゐるのである。

日本の人妻は、歐米諸國の人妻に比して、その大切な良人を他の異性から遙かに多く狙はれてゐると云つてもよいのだ。

その上、近代生活に於ては、多くの女性が、職業戦線へ進出して來たため、男子の職場にも、多くの年若く色美しき女性が、立ち交るやうになつた。彼女等のある者も亦、良人の貞操を脅威する存在となり得るのだ。

妻以外の多くの女性と、嫌でも接觸しなければならぬ多くの良人が、妻に對する貞操を守るこ

とは、なかく容易なことではないのである。

日本では、一寸した社會人の宴席には、藝妓なるものがあつて座間に立ち廻るのである。妻から考へれば、危険千萬な話である。歐米の宴會には、夫人、令嬢以外の女性には、存在しないのである。日本では、小都市でも、一寸した宴會には、藝妓が來るのである。今まで、遊びを知らなかつた眞面目な男性でも、其處で藝妓と面識が出来るのだ。二次會などがあれば、いよく藝妓と親しくなる。多くの藝妓の中には、此方から興味を持つ者も出来るし、又向うから此方に興味を持つものも出来るわけだ。

さういふことから、多くの良人は遊興を覺えるわけである。

だから、どんな眞面目な男性でも、日本では彼等の社會的位置が進めば、自然と藝妓と接近するやうになるのである。

また、藝妓ばかりではない。醫師を職業としてゐる良人は、常に幾人もの看護婦と接觸してゐる。白衣の天使と云はれる人達の中にも、年若く美しい人も多いし、又志操堅實な人ばかりでもないのだ。殊に師弟關係であり、日常接觸してゐるうちには、人間同志であるから、普通以上の

親しみが湧かないとも限らないのだ。

とにかく、現代生活に於ては、良人は妻以外の異性と接觸する機會が多いのである。

その上、賣笑制度が發達してゐて、その意志さへあれば、即刻でも他の異性と接し得るのだ。だから、良人がその妻に對する貞操を守るには、可なり強力な意志が必要なのである。

妻を異性のすべてと思へ

忠實な良人たらんとするものは、結婚の當初に於て、一生、一夫一婦の誓ひを、心の中でしっかりと、誓ふ必要がある。

そして、その誓ひを破る怖れのある方向へは、一步を進めることも慎むやうに努力すべきであると思ふ

一度ぎりの不貞だからいゝだらう。旅行中だからいゝだらう。妻が妊娠中だから、いゝだらう

といつたやうな、最初の破戒が、彼を取り返しつかない道樂者にしてしまふのだ。妻以外の女性の肉體に對する巡禮を始めると、その止まるどころを知らないやうになるかも知れないのだ。妻を異性の凡てだと思ふべきである。妻以外に異性があることを知つた刹那に、もう彼は良人としての貞潔を失つてゐるのである。

世の中の良人を分類すれば、

妻以外の女性を知らぬ人

妻以外の女性を知つてゐる人

の二つだ。そして、妻以外の女性を、一人でも知つてゐる人は、百人知つてゐる人と同罪でありまた百人知るやうになるかも知れない人だ。一圓でも、他人の金を盗んだ男は、百圓盗んだのと同罪であり、又百圓でも盗み得る男だ。

が、日本では、妻の不貞は、法律を以て罰せられてゐるが、良人の不貞は、法律で罰せられないのみか、社會的にも甚だ寛大に扱はれてゐるのだ。

これは、日本の社會制度が、古來男性本位に組み立てられて來た爲であつて、明治初年には、

法律までが、妾といふものゝ存在を認めてゐた位である。だから、男性本位の社會制度を改善するのは、容易なことではない。

政治上の男女同權などは、容易に得られないとしても、せめて性道德の上では、男女同權にした

たいものである。

それは、凡ての男性の心掛け一つで出来ることである。

あらゆる良人が、妻にして貰ひたくないことは、自分がしなければいゝのである。

妻が、他の男性と交際したり、戀愛したりすればいゝのだ。

戀愛したりしなければいゝのだ。妻に貞操を要求する以上、自分も貞操を守らなければいゝのである。妻に貞操を要求してゐながら、

自分丈は平氣で、それを破つてゐるのが、怪しからないのである。

世の中の良人の中で、妻が不貞を働いたら、烈火のやうに怒らない人は、少いだらう。そのく

せ、自分達は、平然として不貞を働いてゐるのである。

(身を抓つて、人の痛さを知れ)といふ俚諺があるが、あまりに、身を抓つて人の痛さを知らな